
転生しました.....原因は分かりません

緋翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生しました……原因は分かりません

【Nコード】

N5771N

【作者名】

緋翠

【あらすじ】

転生したのは誰？

あなた？ 僕？

「いいえ、私です。」

「何を言ってるの？」

「さあ？ なんでしょうね？ アスナ」

「言いましたよね私は」何があっても私がお嬢様たちをお守りします。って、アルトお嬢様」

「刹那、私は男ですよ」

転生をした男の娘の話です。

プロローグ（前書き）

頑張っ
て行きます

プロローグ

突然の事でした

道路から車が飛び出して来て跳ねられました。

神様が言うには即死だったそうです。

あ、今僕は神様の目の前に居ます

俗に言うあれですかね？

転生さしてくれるんですかね？

「うん」

神様は心が読める様です

「読めるよ」

黙ってなさい！！

今説明中なんですから

「は、はい」

涙目に成りながら返事をする神様……

その外見に合った仕草ですね。

神様の外見はF a t eのイリヤスフィールと一緒にだ

「……………」

おゝ、涙を堪えて体がプルプルしてますね。

可愛いです。

「……………もういい？」

首を少しだけ曲げながら聞いてくる神様

良いですよ

「じゃああなたを転生させるね。外見や能力は私（緋翠）が決めといたから、あと向こうでの君の名前は………考えて無いや」

考えて無いんですか？

「うん！！」

神よ、それでいいのか？

「良いんだよ、私がルールだから」

無い胸を張りながら言うな

「ふえゝん、胸についてはなにも言わないでよ……もういいや、いっつちゃえー！！」

無理やり転生させられる

からかい過ぎましたかね？

まあ良いや。

折角の二度目の生

楽しめましょうかね？

今度こそ……………

長生きする事を目標に……

設定（前書き）

設定ツ
ス

設定

名前

アルトリア・ロア

(皆からはアルトと呼ばれる)

一人称

私

性別

男の娘？

外見

F a t e のセイバーの髪の色を銀色にしただけ

身長はネギの頭が目線ぐらいの小ささ

ネギまの世界に転生してからはエヴァの家に世話になる

初期能力 (F a t e 風に)

筋力 C (C) 魔力 B (B+)

耐久 B (B+) 幸運 C (C-)

俊敏 B (B) 宝具 A++

(-) はライオンハート入手後

対魔力 B

転生した時にもらった能力” 雷の暴風” 位の魔法なら傷付かない

騎乗 C

馬になら難なく乗れるが自在に操るには時間が必要になる 自転車
なら余裕

保有スキル

直感 A

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を” 感じ取る” 能力。 研ぎ
澄まされた第六感はや未来予知に近い 視覚、聴覚に干渉する
妨害を半減させる

魔力放出 C 〽 A -

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事に
よって能力を向上させる

カリスマ D

男女問わずモテる 本人は正直いらなと思っています

黄金律 D

まあ遊びに使うお金程度には困らないほどのお金を手に入れれる。

生活するほどのお金は入らない

神性 D

神様に転生するときに関わりを持ったため手に入れた

戦闘離脱 C +

自分がどんな不利な状況でも離脱する事に専念すればどんな状況でも高確率で離脱出来る

そのさいに、一緒に離脱する人数により確率は低下する

精霊の加護 B

精霊からの加護により、危機的な局面なら一時的に幸運をA+まであげる能力

気分屋 C++

天性的な気分屋 その為魔力放出のランクが変動しやすい

宝具

風王結界 (インビジブル・エア)

ランク C (精霊の加護発動時はB)

不可視の剣。

シンプルではあるが白兵戦において絶大な効果を発揮する。

強力な風の精霊によって守護され不可視になっているだけで剣自体が透明という訳ではない。

約束された勝利の剣 エクスカリバー

ランク A++

光の剣。 人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。マジックアイテムの枠に収まらない程の物

数ある聖剣のカテゴリの中では頂点に立つ宝具

所有者の魔力量を飛躍的に上げ収束・加速させる事により運動量を増大させ、最大レベルの魔法行使を可能にする

全て遠き理想郷（アヴァロン）

ランク EX

エクスカリバーの鞘の能力鞘を展開し、自身を別の次元に置くことであらゆる物理、もしくは精神干渉をシャットアウトする

持ち主の魔力が尽きない限り常に治癒魔法を掛け続ける この魔法に持ち主の魔力は使用しない

仲間を護る強き獅子 ライオンハート

ランク B+

アルトのネックレスに魔力を流すと現れる武器

魔力を刃とし流す量に応じて切れ味がます。

嘗て未来の魔女から世界を救ったとされる孤高の戦士の愛用武器ガ
ンブレードの一種

魔力で編まれている刃ではあるが基本最初の状態では持ち主の魔力は消費しない

誇り高き獅子の心 ライオンハート

ランク B

ネックレス状態の能力

魔力、耐久、幸運を常時装備しているだけで多少アップさせる。

性格

気分屋だがやることはやる

誰にでも変わらず接するので皆から好かれやすい

所属クラスは 3 - A

エヴァには転生した時に何も分からない所を親切にもらった恩がある

増えるかもしれません

修学旅行 その1（前書き）

大部分飛ばして修学旅行編

間の話は設定の部分に簡単に書いていきます

修学旅行 その1

転生してからいろいろありました。

詳しくは設定を読んでね！

修学旅行に行く事になりました。

エヴァにお土産を沢山買って行きたいと思います。

班は六班で刹那とザジ達と一緒にですが三人だけになってしまったのでネギ先生に他の班に入れられる事になりました。

アスナ達の班ですね。

一応言って置きますが私がこのクラスに所属したのは学園長が「ま、見た目女の子じゃし良いじゃろ」

なんて理由で女子中学生になって居ます。制服も勿論ちゃんと着てますよ。

私が男なのは皆さんご存知ですからね。

あ、あとこのクラスに私が魔法関係者だと知っているのはエヴァと

茶々丸だけです。

私は平凡な毎日が好きなため警備の仕事は断っているんです。

ネギ先生だって知りません。

あ、電車が発車しますね。

席に着かなければ……

その頃学園では

キンコーン…

「ふう」

屋上にエヴァと茶々丸がいた

「今頃アルト達は新幹線かあ」

ほけ〜としながら眠そうに呟く

「マスターは呪いのせいで修学旅行にいけず残念ですね」

「……オイ何が残念なんだ？別にガキ共の旅など」

「いえ行きたそうな顔をしていたので……」

「アホか、それよりお前行っても良いんだぞ行きたいんだろ？」

「いえ、私は常にマスターのお側に」

「……ふん（アルトの奴ちゃんと土産買ってくるかな？）」

その頃のアルトリアは

「スウ……スウ……」

寝ていた。

電車の中で起きた騒ぎに気付かずに……

すると朝倉が近付いてきて

(アルトの寝顔を頂き〜っと)

写真を撮っていた

するとまき絵が近付いてきて

「朝倉、後でその写真頂戴」

「あ！私も」

そう言っただけでクラスの大半の手にアルトリアの寝顔写真が渡った

勿論その間も

「…スウ…スウ…」

アルトリアは寝ていた

京都に着きました

まずは清水寺に行き皆で集合写真を撮りました

そこからは多少の自由行動が許されます

清水寺でらに來たのなら音羽の滝に行つて健康の水を飲みましょう

音羽の滝に着くと皆からお酒の臭いがします。

何故でしょう？

するとその後すぐにバスに押し込まれ旅館に向かった

なんかのんびり楽しめませんね。

まあ旅館に着いたらお風呂に入りましたよ。

お風呂

「はあ、なんか慌ただしい修学旅行ですね」

クラスのお酒に酔うって凄い問題だと思うんですね私は

さて、もうそろそろ上がりますか

お風呂から上がり、ロビーに行くとアスナと刹那が慌ただしく出て
いきました。

何か有ったのでしょうか？

気になったので追いかけましょう

なんて思っんじゃなかった。

走って追いかけると駅に着いて電車が出ようとしています。

ネギ先生達は乗り込めたのだが私が着いた時にはもう動き始めた。

「仕方ありません。エヴァからの頼みもありますし上に乗りますか」

電車の上に乗り少したつと駅に着きました。猿の着ぐるみを来ている人を追いかけているみたいですね

と、言うかあの三人まだ私の事に気付いてないみたいですね

それから少したちようやく会話が聞こえる位に近づくと

「 テル・マ・スキル・マギステル風の精霊11人縛鎖となりて
敵を捕まえる！」

ネギが相手の女の隙を見て魔法を使う

「ああっしまった！？ガキを忘れてたー」

「もう遅いです魔法の射手戒めの風矢！！」

ネギから魔法の矢が飛ぶ

「あひいっ お助け」

女は抱えていた木乃香を楯にする

それに気づいたネギは

「あっ、曲がれ!!」

魔法の矢を曲げた

「こ、このかさんをはなしてください! 卑怯ですよ」

やれやれじり貧ですね

介入しますか…

「こ、このかをどうするつもりなのよ……」

アスナが女の人に聞く

「せやなーまずは呪薬と呪符でも使て口をきけんよにして上手いこ

とにウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーなクッククク…
…」

「油断し過ぎですよ貴女」

そう言つて私はエクスカリバーを女の首に当てた

「い、いつの間に」

「あ！あなたは！？」

「「「アルト（さん）！？」「」」

「ふう、夜中に出歩くのは感心しないですよ。ネギ先生」

ちよつとからかう積もりで聞いてみる

「アウツ！いや、これは…」

ネギ先生は慌てますか……

「クスッ。冗談ですよネギ先生。状況位は把握しています。」

女から注意は剃らせませんけどね

「あんた何をやってんのよ！」

アスナが聞いてきた

「見ての通りですけど？」

「ただ腕を前につきだしている様にしか見えませんよ」

刹那が言ってくる

ああ確かに端から見たらそうかも知れませんか

「そうですか、なら…… 風よ」

今まで見えなかった剣がその言葉をきっかけに徐々に姿を表す。

「「「「「なっ!?!?!」」」」」

そこには光輝く剣が現れる

「ではこのかさんをはなしてください。」

剣を首もとに突きつけながら脅す

「クッ、仕方ないわ。ここは引くで。」

そう言って神鳴流の剣士と共に女は去って行った

「ふう、ではネギ先生このかさんを任したしたよ。」

そのまま去ろうとする私に桜咲さんが声をかけてきた

「待ってください。アルトリアさんは魔法使いなんですか？」

刹那とアスナも同じ事を思ったのかこっちを見てきた。

「ええ、一応魔法使いというカテゴリーには入るかと……とりあえず眠いので私は帰ります。何か聞きたい事があれば明日にしてください。」

そう言って私は旅館に帰って寝ました

修学旅行 その1（後書き）

すみません。

駄文で……………

こんなんでもまあ楽しかったよ!!

って言う人がいたら嬉しいです。

修学旅行 その2（前書き）

2日目です。

正直アルトリアは傍観者ですね。

修学旅行 その2

次の日の朝

大部屋

「 それでは麻帆良中の皆さん」

「 いただきます」

ネギ先生の掛け声で

「 「 「 「 「 いただきます」 「 「 「 「 「

クラス全員が朝食を食べ始める

朝食が始まってすぐ刹那が近づいてきた

「 アルトリアさん。 昨日の話なんですが……」

「 なんですか？」

「 あなたは敵ですか？」

多少の殺気を込めて睨まれる

「 あなたたちの敵ではないですよ……」

少し笑いながら答える

「そうですか。なら昨日は何故ついてきたんですか？」

多少殺気は消えたもののまだ睨まれている

私は苦笑いになりながら

「クラスメイトがあんな夜遅くに出ていったんですよ。心配するでしょう」

本当はエヴァに頼まれたからですが

「なんか……誤魔化そうとしてませんか？」

目を細めながら疑るようにこつちをみる

そんなに分かりやすいですかね？

「……あ、せつちゃん」

しばらくそのまましているとこのかが刹那に声をかけた
「……」

すると刹那は焦った様に隣からお膳を持って立ち上が逃げるように
離れる

「あんっ何で！？恥ずかしがらんと一緒に食べよー」

刹那はお膳を持って逃げ出した

しかし、それをこのかは追いかける

「せつちゃん何で逃げるん」

「わ、私は別に」

落ち着いて朝食も食べれませんね……

それでも自分のペースでのんびり食べ続け

食べ終わったのは一番最後だった

その後ロビーに行くとクラスの皆がネギ先生に今日の自由時間を一緒に過ごさないかと声をかけていた。

そのなかで、のどかがネギ先生に

「よ、よろしければ今日の自由行動…私たちと一緒に回りませんか
！？」

するともみくちゃんにされていたネギ先生が

「わかりました宮崎さん！今日は僕宮崎さんの五班と回ることになります。」

ネギ先生と一緒にですか……

ま、良いでしょう

奈良公園

「スゴイスゴイ見てくださいアスナさん、わあっ！」
鹿に手を噛まれるネギ先生
可愛いですね

「今のところおサルのお姉さんは来ませんね」

「うーん……」

「おそらく今日は大丈夫だと思いますが…念のため各班に式神を放つておきました何かあればわかります」

「このかお嬢様のことも影からしっかりお守りしますので
人は修学旅行を楽しんでください」 お二

の様な会話をアスナ達がしてますね

そっとう会話は聞こえないようにやったほうが良いですよ。

するといきなり後ろから

「アスナアスナー一緒に大仏見よう！」

のどか以外の図書部のメンバーがやって来てアスナを連れて行った

刹那の方は

「せっちゃんお団子買ってきたえ一緒に食べへん？」

このかから走って逃げて行った

「あれ？」

ネギ先生が一人になったところに

緊張したような様子ののどかが来た

なるほど、なんかついていくとお邪魔に成りそうですね

適当に時間を潰しますか

あ、そう言えば奈良なら美味しい甘いものがありそうですね

自由行動の時間そこに居ましょう

甘味屋に行って土産物を買って帰ろうとすると

ネギ先生を背負ったアスナ達に出会った

「何をやってるんですか？」

「アルト！いや、これは……」

「知恵熱を出して倒れました」

ユエが説明してくれる

「アルト君はなにしてたん？」

このかが聞いてきたので

「甘味屋をいろいろ回ってました。さすが奈良ですね美味しいものがいっぱいです。」

笑顔でそう言うと

「『『『／／／』』』」

ネギ先生以外の皆が顔を赤く染めました

なぜでしょう？

そして皆で旅館に帰りました

その夜

「ええ〜っ！？ま、魔法がバレた！？」

急にアスナの声が聞こえる

そんな大声で魔法なんて単語行っているんですか？

注意をしようと近づいてきた行くと朝倉がネギ先生達に近付いていく

魔法バレた相手って朝倉？

ネギ先生、終わりましたね

「うわっあ、朝倉さん！？」

「ちよつと朝倉あんまり子供いじめんじゃないわよ」

アスナが声をかける

「イジメ？何言ってるのよてゆうーかあんたの方がガキ嫌いじゃないかなかつたっけ？」

朝倉の肩にカモが乗っているのが見えますね

「そうそうこのブンヤの姉さんは俺らの味方なんだぜ」

「え……？味方？」

ネギ先生が呟く

「報道部突撃班朝倉和美力もっちの熱意にほだされて……ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにしたよ。よろしくね」

うわぁ、怪しいですね

「え、えー！？本当ですか！？」

ネギ先生は信じたようです

「今まで集めた証拠写真も返してあげる」

「よかった問題が一つ減りました」

「よしよしネギよかったね」

まあ、大丈夫でしょう

さてもうすぐ就寝時間ですね。

部屋に戻りましょう

そうして私の2回目の夜は終わりました。

大掛かりなゲームが催してあるのも知らずに

修学旅行 その3（前書き）

修学旅行 その3

なんかアルトリアがヒロインに感じてきた……

主人公ですからね！！

修学旅行 その3

朝食を食べているとクラスの女子達がのどかに集まっています。

のどかの手には一枚のカードがありますね

なんでしょう？まき絵辺りなら知って居そうですね

「まき絵、のどかの持っているあのカードはなんですか？」

「え？アルトくん知らないの」

以外そうな顔で聞き返してきた

「ええ」

「あれはね昨日の夜にやったゲームの商品なんだよ。で、そのゲームで優勝したのが本屋ちゃんなの」

なんて会話をしているとしずな先生が

「はいはい皆さん今日三日目は完全自由行動日よ。部屋に戻って準備してねー」

「ハハイ」

そしてクラスの皆が部屋に戻って行く

私服に着替えてどこか行きましようかね？

そうして部屋に戻って修学旅行の着替えが入っているバッグを見ると手紙が入っていた

なんでしょう？

『アルトお前がこの手紙を見るときは私服に着替える時だろう。だから私からこの服はプレゼントだ。お前の用意していたズボンとかは全部出して置いたからそのバッグには入って無いからな。諦めてそれを着るが良い。エヴァ』

そう言っ中を見ると

黒いゴスロリ服しか入って無かった

仕方がない。

着替えるか……

そうして外に出ると

すぐに朝倉たちに見つかった

「アルト、あんた何を着てるの!？」

「……見ての通りです」

「あたしが聴きたいのは何でアルトがそんなゴスロリ服を着てるのか? って事なんだけど」

「今私服がこれしか無いんです。エヴァのせいで……」

「そう言えばアルトとエヴァちゃん仲良いよね。なに、付き合ってるの?」

録音機片手に聞いてきた

「エヴァはただの恩人ですよ」

「なあーんだ、（帰ったらエヴァちゃんに聞いてみよ。）」

すると他にも声をかけられた

「あら似合ってるわね」

千鶴までいるとは

…………マズイ

千鶴は苦手だ。

「…………では私はこの服だから今日は旅館に1日いますので行ってらっしゃい」

そう言ってその場を離脱しようとしたのだが

ガシッ

肩を捕まれる

「…………離してください千鶴」

「イ・ヤ！アルトリア君は今日予定無いのよね」

「まあ、一応無いですね？」

戦闘離脱（戦闘じゃないが）のスキルが役にたたないとは

やはり千鶴は恐ろしい……

「私たち今日シネマ村に行くんだけど一緒に行きましょう？」

疑問系だが有無を言わせない何かが込められている。

「……はい」

そうして私はシネマ村に向かうことになった。

シネマ村

「ここ来たら最初にやることは一つ！！」

朝倉がテンションを上げて言った

「何をやるんですか？」

いいんちょが朝倉に聞くと

「変装だよ変装」

「女物はいやですよ？」

ここに来るまでもう三回ナンパされました。

しかも私が……

三回のナンパ中二回は断ったらちゃんとひいてくれたんですが一組が最悪でしたね。

路地裏に連れて行かれそうになりましたもん

まあ、筋力Cなので軽く投げ飛ばしましたが……

「え？何を言ってるのアルトあんたが着るのは決まってるよ。」

え？

「来る途中に千鶴と相談しながら来たからね。その時に決まった。」

「ええ。アルト君は西洋のお姫様よ。」

「い、イヤアアア！！！」

走って逃げようと思いますが

ガシッ

また肩を捕まりました

「イヤ、離して！！女物は着たくない！！」

「じゃ、よろしく願います。」

そう言って店員に押し付けられた私である

三十分後

漸くメイクと着替えが終わって出ていくと朝倉たちはもう居なかった

やれやれ。

適当に見て回るとしますか

そうして回り始めると

他の中学生に声をかけられる

「すみません。写真撮っても良いですか？」

「ええ。構いませんよ」

「じゃあ、すみませんがこちらの美少年剣士の方たちと一緒に」
そう言われて見てみた先には

変装した刹那とこのかがいた

「……………」

私と刹那は無言になったが

「うわっアルト君似合っとなるなあ」

このかがそう言ってきた。

「……………」ありがとうございます

一応お礼を言っておく

「撮りまーす。」

「ほら、せっちゃんもアルト君もポーズ！」

「「え？」」

慌ててポーズを取る私と刹那

刹那は片手でこのかを抱きこのかはそれに抱かれる

私はそんな刹那を後ろから抱き着くポーズを撮った

「「／／／」」

「ありがとうーございますー」

中学生達がお礼を言う

「えへへせっちゃん男の子見たいやしアルト君は女の子見たいやし
ウチらせっちゃんに手を出された女の子見たいに見えるかもなあ
」

「なっ…何を言い出すんですかお嬢様!!」

「その割にはノリノリにポーズ取ってましたよね」

「アルトさん!!」

「フフ、冗談ですよ。っと、すみません今の写真データ貰えませんか？」

せっかく撮ったんだし貰っていいこう

「あ、私も」

「あーせつちゃんウチもー」

そうしていると馬車が急に来て横に停止した

「ひゃあっ」

「お……お前は!？」

「どうも 神鳴流です じゃなかったです……その東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます そこな剣士はん今日こそ借金のかたに二人のお姫様をもらい受けに来ましたえ」

そう言つて先日にかを拐つた仲間の一人
神鳴流剣士 月詠が現れる
こんな人混みの中で

「な……何？何のつもりだこんな場所で」

「せつちゃんこれ劇や劇お芝居や」

このかがボソツと呟く

「（なるほど劇に見せかけて衆人監視の中このかを連れ去ろうとしているのですね）って二人のお姫様って私ですか！？」

「そうはさせんぞこのかお嬢様は私が守る！」

「キヤーせつちゃん格好え」

このかが刹那の腕に抱きつく

「わ、い、いけませんお嬢様……」

顔を赤くして慌てる刹那

面白そうですね

私も参加してみますか

「刹那格好良いですね!!」

そう言って空いている片方の腕に抱きつく
そして

「でも……私は守ってくれないんですか？」

「ア、アルトさん!!?何をやっているんですか? / / / /」

……反応が面白いですね

「そーおすかーほな仕方ありまへんな」
手袋を外し

「えーい」

刹那に投げる月詠

「む……」

「このか様とアルト様をかけて決闘を申し込ませて頂きます
0分後場所はシネマ村正門横“日本橋”にて」

3

「ご迷惑とありますが……手合わせさせて頂きたいんです
逃げたらあきまへんえ 刹那センパイ」

そう言っ て殺気をぶつけてくる

「ほな、助けを読んでもかまいまへんえ」

そう言っ て馬車に乗っ て離れていく

「刹那……行くんですか」

このかに聞こえない様に声をかけると

「仕方ない……やるしかないだろう」

ドドドドッ

「ん？」

「わあっ！？」

朝倉達がやって来た

「ちよつと桜咲さんどーゆーことよー！？」

「も 何でこんな重要なコト言っ てくれなかったの？」

「それでそれで三人はどんな関係なの！？」

「今の子は何！？センパイとか言っ てたけどもしかして昔の女……とか、キヤーそっ か桜咲さんもこのかも確か出身京都だもんね な

るほど　　ってそうするとアルト君は「

千鶴　朝倉　パルに矢継ぎ早に質問される

「ちょちょ、ちょっと待ってください。皆さん何の話をしてるんですか!？」

「いやいや、うんお姉さんは応援するよお。記事にするとか野暮は言わないから安心してって」

「私たち味方だからね桜咲さん!!」

「いいよねみんな?よし決めた!!」

「三人の恋私たちが全力で応援するよ　　!!」

「わああ!??ちょちょ違うんです待って皆さん　っ」

「いやあ、大変ですね刹那」

「大変だと思うなら説明してくださいよ!!」

ハッハッハ

千鶴がいる時点で私は無力です……

そうして

私、刹那、このか、朝倉、いいんちょ、パル、ユエ、千鶴、村上の
九人で日本橋に向かって行く途中にちっちゃいネギ先生がやって来た

日本橋に着くと

橋の上に月詠が二本の小太刀を持って待っていた

「ぎょーさん連れてきてくれはっておおきに 楽しくなりそうです
な」

「ほな始めましょうかセンパイ……このか様もアルト様も刹那セン
パイも……ウチのものにして見せますえ」

月詠が手に持っている小太刀に舌を這わせながらいう

「……」

「フフフ」

「せ……せっちゃんあの人なんかこわい

き、気をつけて」

「刹那……頼りにしますね」

「……安心して下さいこのかお嬢様、アルトお嬢様……」

そして一歩前に出て私たち二人を庇うように

「…何があっても私がお嬢様たちをお守りします」

「……せ、せつちゃん」

「／／／／（格好良いじゃないですか……）」

パチパチ

拍手が起こり始める。

「桜咲さんかつこいいわね。あやか」

「ええ!!」

「ウチの部に来てくんないかな 男役で」

ガシッ

いいんちよが刹那の手を握り

「桜咲さん!!お三方の愛!!感動いたしましたわお力をお貸します!!」

「だから違うんですってばいいんちょ」

「ホホホホそちらの加勢はないのかしら私たち桜咲さんのクラスメイトがお相手いたしますわ!!」

「いいんちょさ……」

「ツクヨミ……と言ったか？この人達は……」

「ハイセンパイ。心得てます　この方たちには私の可愛いペットがお相手します」ひゃっきゃこお　……」

月詠の回りの式から妖怪が現れる

回りの観客は

「おおーっスゴイCGだ!!」

「さすがシネマ村アクション」

「じ、これは……」

ちっちゃいネギ先生が驚いてます

「ネギ先生！このかお嬢様とアルトを連れて安全な場所へ逃げてください！！」

「え、でも」

「見かけだけですネギ先生を等身大にします」

ボン

「わぁ僕は忍者の役ですか」

「ひゃあっ！？ネギ君いつの間に！？」

このかが驚いている

「刹那」

「何ですかアルト」

「さっきのセリフ……格好よかったですよ。お礼といっではなんですがこのかは私が守りましょう。……だから……怪我しないでくださいよ」

「……ネギ先生がこのかお嬢様を連れて行っちゃいましたよ。だから早くいってください」

「はい。」

ネギ先生を追いかけますか

「ネギ先生」

「わあっ！？ってアルトリアさんですか」

「私も一緒に」

「わかりました」

そうして逃げて行き周りが石に囲まれている扉に入った

「このかさんここに隠れましょう」

「おけ」

「いや、ネギ先生ここお城……」

って聞きなさいよ！！

階段を上っていく

「なんだか長い上り階段だな」

「あ、ネギ君部屋や！」

「よし」

ガラッ

部屋に入るとこの前の女と一人の少年がいた

「ようこそ、このかお嬢様月詠はん上手く追い込んでくれはったみたいやな。それにそこのお嬢ちゃんも先日は世話になったなあ。おや？そっちの坊や何でここに？小太郎が閉じ込めとるはずやのに……はは〜ん読めましたえ」

少し考える素振りをしながら

「あんた実体ちゃうな。ってことは手も足も出ん役立たずや」

女の後ろに式神が現れる

「ネギ先生！とりあえずこっち」

二人を連れて上に上っていく

side 刹那

月詠と剣を打ち合っていると観客のほうからざわめきが聞こえた

「アレ見てアレ」

おおっ

「ほらお城の上！あんなところでも劇が……」

城の上に目を向けてみると角に追い詰められた三人が見えた

「お嬢様！？」

「あら、よそ見はあきまへんえ」

「ぐっ」

まずはこいつを何とかしないと

アルト

頼みましたよ……

side out

角に追い詰められた私たち

「きーとるかお嬢様の護衛桜咲刹那、この鬼の矢が三人をピタリと狙つとるのが見えるやろ！」

女の横では式神の鬼が弓に矢をつがえ構えている

「お嬢様の身を案じるなら手は出さんときー！」

それから声を小さくして私たちにしか聞こえないように

「フフ……ネギ言つたか坊や？一歩でも動いたら射たせてもらいますえ」

「さあ、おとなしくお嬢様を渡してもらおか」

「ネギ君こ、これもCG……とちやうよね……やっぱ」

不安そうにこのかが言う

「あの、すみませんこのかさん……」

「ネギ先生大丈夫ですよ。刹那が何があっても守るって言ったんです。必ず刹那が助けてくれますよ。ね、このか」

「うん!」

「こ…このかさん、アルトリアさん」

「何グズグズ言っとるんや早いところお嬢様を……」

強い風が吹く

「ひゃっ」

「このかさん」

ネギ先生がこのかを支えるために動く

すると式神が矢を放つ

「あーっ！？何で撃つんやーッ。お嬢様死なれたら困るやろ」

「クッ」

ネギ先生が前に出て私たちを庇うように手を出しますが実体ではないため貫通する

「ッ」

このかを庇い前にでてエクスカリバーを構え弾こうとすると

ダンッ

刹那が急にできて私を庇うように矢を受けました

すると勢いが止まらないのか城の屋根の上から落ちてしまいました

「せつちゃん！」

このかも刹那を追い掛けるように飛び降り

「危ない」

気付いた時にはもう体が動いてました

私も二人に続く様に飛び降ります

空中で二人に追いつくと二人を抱き締めます

するとこのかから魔力の反応が

カッ

辺り一面が光に包まれ私たち三人はこのかの魔力で城の周りの池に立っている

刹那の肩に刺さっていた矢が抜け傷を治す

「あつ、せつちゃん……よかった」

「刹那、大丈夫ですか？」

「お……お嬢様……アルト……」

タンッ

石垣の上まで移動する

「傷がない？」

「アルト……お前が治してくれたのか？」

「いいえ、私じゃありませんよ」

「では！？お……お嬢様チカラをお使いに……？」

「ウ、ウチ今何やったん？夢中で……」

するとちっちゃいネギ先生がやって来た

「刹那さん」

「ネギ先生」

「敵の数も多いここは一度落ち合おうぜ」

カモがそう提案する

「そ……そうですね」

何か迷ったような顔をして

ガバッ

このかをお姫様抱っこする

「お嬢様、今からお嬢様のご実家へ参りましょう。神楽坂さん達と合流します!」

「え……」

二人はこのかの家に行くらしいですね

「アルトさんもね」

「え?」

声をかけられるとは思いませんでした

顔に出ていたのか

「言ったでしょう」何があっても私がお嬢様たちをお守りします
ってアルトお嬢様」

「／／／からかってるんですか、私は男ですよ。」

「ええ、先ほど困っていたところを見捨てられたので」

「では、か弱い私は格好いい武士に守られるとしますかね」

「ええ、もちろん」

「でも、私も守りますからね」

「何をですか？」

「あなたとこのかを」

「／／／ええ、よろしくお願いします」

「フ、フフフ」

「二人とも、ウチがおること忘れてへんか？」

「／／／／すいません！このかお嬢様」

「別にええよ」

フフフ

さて頑張りますかね

修学旅行 その3（後書き）

感想やアドバイスをくださると嬉しいです。

あと誤字、脱字などありましたら教えてください

雑談や質問もあれば書いてください

答えますんで

修学旅行 その4（前書き）

アルトリアのセリフ少なっ!!

って思いますが読んでみてください

修学旅行 その4

シネマ村

「着替え終わりましたか？」

「うんせっちゃん」

「はい。」

「……………」

「…なんですかその目は
予想はできませんが」

「アルト君の私服かわええなあ」

「……趣味か？」

「断じて違う!!」

「さてそれでは行きますか」

「刹那、なぜ目を合わせないのですか？」

返事をせずにこのかを抱き抱え外に飛び出す

「やれやれ」

そうしてこのかの実家に向かっていきあと少しで着くところ……

「おーい桜咲さん！」

シネマ村で別れた朝倉達がいた

「なぜここに！？」

「いや〜ゴメンねえ。桜咲さんの荷物にGPS携帯入れてあるんだ」

「……いつの間に」

「まあここまで来ちゃったんだし連れてってよ」

パルが言う

しょうがないので連れて行くことにしました

それから歩くこと五分

ネギ先生達が見えた

「おいアスナー」

このかが声をかける

すると此方に気付いた様だ

それから皆でこのかの実家に歩いて向かう途中

「ちょっと桜咲さんどーゆーことよ。何で皆までついて来てるの？」

小声でアスナが聞いてきた

「いえ、それがその…私とアルトはお嬢様を連れてここまで走つてたどり着いたのですが……」

「今さっきそこで朝倉たちに捕まってしまったんですよ」

「んふふ。私から逃げようなんて百年早いよ」

なぜ追い付いたのか説明をし

「　　って訳よ」

「ちょっと朝倉！桜咲さんも桜咲さんよ！」

「朝倉あんたこの危険さ全然わかってないでしょ？ネギなんかさっき死ぬところだったのよ！？」

なんて会話をしているとパル達が

「あ、見てみてあれ、入り口じゃない？」

「レッツゴー！」

走り出すのかとユエとパルにのどか

「あーちょっとみんな！そ、そこは敵の本拠地なのよ！？」

「何が出てくるか」

構えるネギとアスナ

門の内側に入ると

「「「お帰りなさいませこのかお嬢様ーッ」「」「」

沢山の巫女さんがいた

「「へ？」「」

呆けるネギとアスナ

「うつひゃーこれみんなこのかのお屋敷の人？」

パルが驚いている

「さ、桜咲さんこれってどーゆー……」

私も気になりますね

「えーと、つまりその、ここは関西呪術協会の総本山であると同時に、このかお嬢様のご実家でもあるのです」

「「ええ　　っ!？」」

初耳ですね

「それ初耳よ何で先に言ってくれなかったの」

「すいませんっ……………今ご実家に近付くとお嬢様が危険だと思っていたのですが……………シネマ村ではそれが裏目に出ってしまったようですね」

「ご実家……総本山に入っしまえば安全です」

「そっか、ここがこのかの実家かー」

そんなことを言うアスナに不安が合ったのかこのかが

「アスナ……ウチの実家おっきくてひいた？」

「え？ううんっ……ちょっとビックリしたけどね……いいんちよで慣れてるし……」

そのあと巫女さんに大広間に案内され

西の長が現れた

「ようこそアスナ君このかのクラスメイトの皆さん、そして担任のネギ先生」

「お父様久しぶりやー」

「はは、これこれこのか」

「このかさんのお父さんが西の長だったんだ」

ネギ先生が呟くと

パル達が

「こんなお屋敷に住んでる割りに普通の人だね」

「てゆうかちょっと顔色悪い感じだけど」

するとアスナが

「洪くてステキかも……」

アスナの趣味はわかりません

「あ、あの長さんこれを」

ポケットから新書を出す

「東の長、麻帆良学園学園長近衛近右衛門から、西の長への新書ですお受け取りください」

そう言つて新書を渡すネギ先生

中身を見た西の長は若干苦笑いになりつつも

「……………いいでしょう。東の長の意を汲み私達東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労！！ネギ・スプリングフイールド君」

「ハイ！！」

「おー何かわかんないけどおめでとう先生」

朝倉たちが労う

すると西の長が

「今から山を降りると日が暮れてしまいます。君たちも今日は止まっていくといいでしょう。歓迎の宴を用意致しますよ」

「やったあ！！」

朝倉たちが喜ぶ

私も疲れましたし

少しのんびりしたいですね

そして宴が始まった

宴が始まり暫くすると横に座っていた刹那に西の長が声をかける

「刹那君」

「こ、これは長。私のような者にお声を」

「ハハ……そうかしこまらないでください。昔からそうですね君は……この二年間このかの護衛ありがとうございます。私の個人的な頼みに応えよく頑張ってくださいました。苦勞をかけましたね」

「ハッ……いえ、お嬢様の護衛は元より私の望み、なれば……もったいないお言葉です。しかし、申し訳ありません。私は結局今日お嬢様に……」

「話は聞きました。このかが力を使ったそうですね」

「ハイ。重傷のハズの私の傷を完全に治癒する程のお力です。」

「…それで刹那君が大事に至らなかったのならむしろ幸いでした。」

西の長はまるで父親のような雰囲気です。刹那に声をかけているが

「西の長さん。私が魔法関係者じゃなかったらどうするんですか？
そんな簡単にこのかが力を使ったなどと言って……」

「いえ、刹那君があなたがいるのに話に応じてくれた。これであな
たが魔法関係者と言っつのはわかりますよ」

へえ、刹那のことを信頼しているんですね

すると長はネギ先生の方に向いて

「このかの力のきっかけは君との仮契約かな？ネギ君」

「おそらくは……」

「え！？」

ネギ先生は酷く慌て

「あう、えっ！？何で知って……そ、そ、そうなんですか！？あの僕……す、す、すいませっ」

「ハハハいいのですよネギ君。このかには普通の女の子として生活してもらいたいと思いき密にしてみました……いずれにせよこうなる日は来たのかもしれませんが。刹那君君の口からそれとなくこのかに伝えてあげてもらえますか」

「長……」

side 刹那

あれから暫くして私とアスナさんはお風呂に入っている

「ふーっ今日は色々あって汗かいたからサッパリする」

「フフ…疲れもしっかり洗い流してくださいね。」

「にしても広いお風呂よねーお屋敷の広さにもおどろいたけどさーあれ……？このかのお父さんが関西呪術協会の長ってことは……えーと、つまりこのかは……」

「あ、それはあの……」

「あ、それより聞いたわよーシネマ村でこのかとアルトのこと身を挺して守ったんだってね。何か刹那さんってお姫様を守る騎士って感じだよーただのボディーガードって関係じゃないってゆーか」

「なっそそそんな関係じゃありませんよっ」

「そーゆー神楽坂さんはどうなんですか。神楽坂さんがネギ先生にあんなに一所懸命協力するのはちょっとおかしいです」

「なっ何の話してんのよ」

「一般人の神楽坂さんがあんな危険な目にあってまだ協力するなんて」

「ちがつ……だってあいつガキだし心配で」

「私もお嬢様が心配なだけですーっ」

なぜ私はこんな不毛な言い争いをしているのだろう

「あの神楽坂さん実は」

「あーあの…何か…アスナでいいよ私」

「あ、そうですねじゃあ私も刹那で……あのアスナさん色々と話したいことがあるので……あとでこのかお嬢様と一緒にこのお風呂場に来て頂けますか？」

「え？うんいいけど……」

「ハハハハ」

脱衣場から声が聞こえる

「しかし10歳で先生とはやはりスゴイ」

「いえ、そんな」

「いや、十分スゴイですよ」

アスナさんと小声で

「あの声はネギとアルトとこのかのお父さん！？」

「なっどうしましょうアスナさん」

そして近くの岩に隠れた

ガラッ

三人が入ってくる

「このかのことよろしくお願いしますよ。ネギ先生アルトリア君」

「はい、わかりました」

「ええ」

「せ、刹那さん何で隠れてんの私達」

「すみません。つい、いつものクセがでて…」

長の話し声が聞こえる

「この度はウチのものたちが迷惑をかけてしまい申し訳ありません。

昔から東を快く思わない人はいたのですが…今回は実際に動いた者が少人数で良かった。後のことは私達に任せてください。あいにくどこも人手不足で腕の立つ者は仕事で西日本全域に出払っているんですが……明日の昼には各地から腕利きの部下たちが戻りますので奴らを捕まえますよ」

「は、はい！それで……あのお猿のお姉さんの目的は何だったんですか？」

「お猿の……天ヶ崎千草のコトですか……彼女には色々と西洋魔術師に対する恨みのようなものがあって……いや困ったものです」

「なぜ、このかを狙うんですか？」

アルトが聞く

「切り札が欲しいのでしょうか」

「切り札？」

「ええ、二人とも薄々お気づきとは思いますが……やんごとなき血脈を代々受け継ぐこのかには凄まじい呪力……魔力を操る力が眠っています。その力はネギ君のお父さんサウザントマスターをものぐ程です。つまり、このかはとてつもない力を持った魔法使いなのです。その力を上手く利用すれば西を乗っ取るどころか東を討つことも容易いと考えたのでしょう」

「ですからこのかを守るために安全な麻帆良学園に住ませこのか自身にもそれを秘密にして来たのですが…」

「へえ、そうなんですか」

「あ、あれ？ところでサウザントマスターのコトをご存知なんですか？」

「君のお父さんのことですか？フフよく存じてますよ。何しろ私はあのバカ…ナギ・スプリングフィールドとは腐れ縁の友人でしたからね。」

「え……？」

「ですからシネマ村の一件はどう見ても不可思議なのです！」

「だからもーCGだってばCG。ワイヤーアクション」

「私をこのかさんと一緒にしないでください」

「おやおやご婦人方が…これはいけませんね！ご案内を間違えたか

な？緊急事態ですネギ君アルト君！裏口から脱出しますよ！」

「えっ？長さん！？」

「こっち来たわよどーすんの！？」

「どどどーと言われてもっ」

後ろから何かにぶつかられた。

「イタタタ」

胸に違和感を覚えて目を開けるとアルトがひとの胸を驚掴みにしていた

隣ではアスナさんがネギ先生に……

「／／／ツ！！す、すみません刹那」

「／／／いえ、事故ですし……それより早く手をどけてもらって……」

ガラッ

「朝倉さん私に何か隠しているでしょう」

「ゆえっちはからみ上戸だねえー」

「私は酔ってませーんっ」

朝倉さんとユエさんとお嬢様とパルさんのどかさんが入ってきた。

「ん?」「え?」

「」「あ……………」

「キヤー」

「いやーん」

「あわわ」

「お父様のエッチー」

「ハハハ」

「何で男女別じゃ無いんですかー」

「温泉じゃ無いんですから」

一方その頃の旅館では西の長が放ったネギたちの式神を見てクラスメイトは

「なんか今日のアスナとネギ先生変だよー」

「そう言えば朝倉とかも目が虚ろで……」

「アルト君なんかまだゴスロリ服来てるよ……」

なんて会話がなされていた

修学旅行 その5（前書き）

修学旅行も大分終盤に入って来ました

修学旅行 その5

お風呂上がりにネギ先生と歩いていると

「うーん、このかさんのお父さんがサウザントマスターの友達だったなんてねー。でも新書も渡したし明日は父さんの住んでた家に案内してくれるって言ってたし！目的は全部果たしたねカモ君」

「おうよ兄貴！」

「……………」

終始無言の私が気になったのか

「どうかしたんですか？」

「いえ、どうも嫌な予感がして……………」

その瞬間

「きゃああああ」

「「「!?!?!」」」

「アルトさん今の!?!」

「悲鳴ですね。多分朝倉達の部屋から」

走って駆けつける

中には固まっている朝倉とパルとのがいた

「あれ?皆さん何してるんですか?固まっちゃって何かの遊びですか?」

いやネギ先生遊びであの悲鳴はないでしょう……

「!?!……これは!?!」

ようやく固まっていることに気づくネギ先生

「高等魔術『石化』ペトリフィケーションですね」

「のどかさんのどかさん!?!」

「落ち着け兄貴ヤツラだ!!」

「でもみんなが!」

「落ち着きなさいネギ先生石化なら長が解いてくれるでしょう」

「それよりヤツラに備えろ兄貴!」

「でもっ……総本山にいれば敵は手を出せないハズじゃないの!?!」

「来てしまっているんです。仕方ないでしょう。今は現状分析よりやる必要があります。」

するとネギ先生は何か思い出したように

「アスナさん!!」

かけだした

一人は危ないですよ

カードを頭に当て念話をするネギ先生すると走り出しながら

「杖よ!!」

ネギ先生の手には杖が飛んでくる

あっちは大丈夫でしょう。

私は不穏な力が感じられるあちらの方へ行きますか。

「魔装装着」

服の上から鎧を来て走り出す

そして力の場所には

「おおっ……や、やるやないか新入り!? どうやって本山の結界を抜いたんや!? 最初からお前に任せといたら良かったわ」

白い少年と千草がいた

気分が乗らなかったせいはいささか到着するのに時間がかかったけど……

「ふふ……しかしこれでこのかお嬢様は手に入った。あとはお嬢様を連れてあの場所まで行けばウチラの勝ちやな」

「……………」

白い少年のほうが此方を見ってきます

気づいてますか

「待ちなさい!!」

ならせめて……

ネギ先生たちが来るまでの時間を稼ぎましょうかね？

「おや？またあんたか？」

「ええ、その人を返して貰えませんかね？」

「ふふ、無理や」

「なら仕方がないでしょう。お相手します。」

構えたと同時に

「そこまでだ。お嬢様を離せ!!」

刹那たちが現れた

「天ヶ崎千草!! 明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ。無駄な抵抗はやめ投降するがいい!!」

「ふふん…… 応援がなんぼのもんや。あの場所まで行きさえすれば…… それよりも」

千草が近づいてくる

「あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ。本山でガタガタ震えてれば良かったと後悔するで…… お嬢様失礼を」

そう言っこのかにお札をはる

「オン」

このかの魔力を使って

「キリキリヴァジャラウンハッタ」

詠唱をすると周りから沢山の鬼を召喚する

「ちょっとちょっとこんなものなの!？」

「ヤローこのか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな」

「ひゃ百体くらい軽くいるよ」

「あんたにはその鬼どもと遊んでてもらおか。ま、ガキやし殺さ
んよーに”だけ”は言っとくわ安心しときい。ほな」

そう言つて二人は飛んでいった

「ま、待て」

「刹那!落ち着きなさい」

「クウッ」

周りを鬼たちに囲まれる

「何や何や。久々に呼ばれた思ったら……相手はおぼこい嬢ちゃん坊っちゃんかいな」

「悪いな嬢ちゃん達呼ばれたからには手加減できんのだ。恨まんといてな」

「刹那さんこんなの……さすがに私」

「アスナさん落ち着いて……大丈夫です！」

「ネギ先生。時間が欲しいので障壁を」

「はい、ラス・テルマ・スキル・マギスキル逆巻け春の風我らに風の加護を”風花旋風風障壁”」

私たちを囲むように竜巻が起きる

「これって!？」

「風の障壁ですただし2、3分しか持ちません」

「よし手短かに作戦立てようぜ!?!?どうするこいつはかなりまずい状況だ!!!」

カモが提案すると刹那が

「……」二手にわかれる。これしかありません」

「私が一人でここに残り鬼達を引き付けます。その間に三人はお嬢様を追ってください」

「ええっ」

「そんな刹那さんっ」

「任せてくださいああいう化け物を退治調伏するのが元々私の仕事ですから」

「でもそんなっ、じゃあ私も一緒に残るー！！」

「」「ええっ」「」

「アスナさんっ」

「刹那さんをこんなところに一人で残していけないよ」

「いや……待てよ案外いい手かも知れねえ！どうやら姉さんのハリセンは叩くだけで召喚された化け物を送り返しちまう代物だ！あの

鬼達を相手にするにや最適だぜ!？」

「へえ、そんな効果があるんですかそのハリセン」

「よし、鬼どもは姉さんと刹那の姉さんにアルトの旦那が引き付けておく!!兄貴は一撃離脱でこのか姉さんを奪取!!あとは全力で逃げて本山に向かってる援軍を待てば良いって寸法だ!!どうだ!？」

「そう上手く行きますか？」

「分の悪い賭けだけどな……だが他に代案があるか？」

でない

「わかりましたそれでいきましょう」

「決まりだな!!」

「よし、そうとなったらアレやっとなつていけ!!」

「アレって」

アスナが嫌な顔してカモに聞く

「キスだよキス！仮契約」

「「えええっ！？」」

「緊急事態だ！！手札は多いほうがいいだろうがよぉー！！」

そして魔方陣を書くカモ

「すみませんネギ先生」

「いえ、こちらこそ」

口づけをする

なんかム力つきますね。ネギ先生が

「先生……このかお嬢様を……頼みます！」

「ハイッ」

「見つめあい過ぎです」

間に割り込む

するとカモがニヤニヤしながらこっちを見る

「何ですか？」

「いやあ、すいませんね旦那！兄貴が……」

「風がやむ！来るわよ」

アスナの声に会話が途切れる

「雷の暴風！！」

風が途切れた瞬間ネギ先生が魔法を放ち飛びだす

「落ち着いて戦えば大丈夫です！見た目ほど恐ろしい敵じゃありません。私のこの剣もアスナさんのハリセンも……そう言えばアルトの武器って剣なんですか？」

今さら？

「そうですよ」

「せいぜい街でチンピラ百人に囲まれた程度だと考えてください」

「楽勝ですね」

「アルト基準で考えないでよ！」

「こいつはこいつは勇ましいお嬢ちゃん達やな」

鬼が言う

「しょーがないわね」

「それでは、鬼退治といきましょうか!!」

「はい！」

そうして戦いが始まった。

戦いが始まって少したつと

「このお！」

アスナがどんどん鬼をハリセンで返して行く

「これで10匹目……私つてば強いかも……」

それからもどんどん返して行くアスナ

「このガキ!!」

「やっちまえいつ!!」

鬼達が数人一辺に襲い掛かる

「わ」

だが

「神鳴流奥義……」

影から刹那が現れ

「百烈桜花斬」

カバーをする

「ありがとう刹那さんいけそうだよ!!」

「ええ」

すると二人の後ろから鬼が一人現れる

「やれやれ、油断しすぎですね。」

一太刀で鬼を切り捨てる

「アルト!!」

「行きますよ!!アスナは左刹那は右を……」

「OKハイッ」

「やああ!!」

「おお!!」

「でええい!!」

ドカァッ

周りの鬼達を吹き飛ばし背中合わせになる

「結構……いいコンビかもね私たち」

「ふふっ」

「全く……」

「修学旅行帰ったら剣道教えてよ刹那さん」

「良いですね。手合わせしましょうか刹那」

「えっいいですけど……私もまだ未熟なので……ってアルトさんは私に剣を教えてくださいよ！私たち二人より遥かに鬼を消してるじゃないですか！ー」

そんな軽口を叩いていると

「ひゃ……百五十体の兵が3分で半ばまでも……」

「ぐあつはー天敵の神鳴流はともかくあの嬢ちゃんのハリセンは反則だしあつちの西洋の騎士の嬢ちゃんは力が違い過ぎますぜオヤビ
ン」

「ぐわははは元気のいい娘っ子達やな……ところで、すかあとのし
たに肌着を着けへんのが最近の流行りなんかいな？」

アスナはその言葉を聞いてスカートをおさえる

ってなぜ下着を着けて無いんですかアスナ！！

「お、動きが遅くなつたで引っ捕らえい」

「何でいつもこんな役！？」

スカートを押さえながら逃げ回るアスナ

やれやれ

助けますか

修学旅行 その5（後書き）

感想や誤字、脱字があったら教えてください。

修学旅行 その6（前書き）

鬼神クスナの辺りまで

次回で修学旅行編は終わりの予定

もしかしたらあと一話入るかも……

修学旅行 その6

少し時がたち……

「てやあああ！」

「奥義雷鳴剣……」

二人が鬼を倒していく。

「まったく……中学生とは思えませんね。」

「スキあり!!」

鬼が後ろから奇襲をする。

「甘い!!」

一歩後ろに下がり

「エルフィンダンス!!」

前に踏み込んで斬る

ドサッ

鬼が倒れる

「やれやれ……」

「大丈夫ですかアスナさん」

肩で息をしながら聞く刹那

「うん！敵ももう半分以下だよ」

「あまり無理はしないでください」

「貴女もね刹那」

一応声をかけておく

「大丈夫行けるよ。あとはネギがこのかを取り返して戻ってくれば……ぎゃ！？」

アスナの目の前から烏族の式神が現れて斬りつける

「む……烏族！？アスナさん！！」

刹那が声をかけるが刹那の前からも式神がくる

「なかなかやるなあ嬢ちゃん。しかし某は今までの奴等とはちと出来が違うぞ！？」

剣で斬りつけながらアスナに警告し持っていた剣の柄でアスナの防御を破る
そして

「え？」

そのまま斬りつける

「あっああ」

「ハッ」

岩に叩きつけられるアスナ

クッ

行こうとすると前に鬼達が現れて道をふさぐ

「西洋の嬢ちゃんの相手はワシらや」

「さつきから西洋の嬢ちゃん、嬢ちゃん、私は男ですよ!!!(しかしこいつらも別格か……アスナ、少し頑張ってくださいよ)」

すると遠くに光の柱が見える

「あの光の柱は!？」

「どうやら雇い主の千草はんの計画が上手くいってるみたいですね
あの可愛い魔法使い君は間に合わへんかったんやろか。まあウチには関係ありまへんけどなー刹那センパイ」

「っ……月詠!!」

「あっ!!」

烏族に手首を掴まれるアスナ

「アスナさん!!」

「ええい!!」

助けようと動こうとしますが……

「おっと……あなたの相手はワシらや」

鬼達を先にどうにかしなければ……

すると刹那から別の力を感じた

その瞬間

ドシュッ

アスナの手首を掴んでいた烏族の頭が撃ち抜かれる

「ぬおおってしまった新手か!？」

ゴキッ

ガンッ

「これは術を施された弾丸……何奴!？」

「……らしくない苦戦してるようじゃないか？」

「え」

「ええっ!？」

なぜここにあの二人が？

「この助っ人の仕事料はツケにしてあげるよ刹那」

「うひゃーあのデカいの本物アルかー？強そアルねー」

龍宮真名にクーフェですか

ありがたいですね

ガンガン

銃声が響く

どんどん鬼達を消していく最中 四人の烏族が真名達を囲む

「接近戦で鉄砲は使えまい」

真名は足下のギターケースを蹴ると中から二丁の拳銃が出てきて囲んでいた烏族を撃ち倒す

その様子をみたアスナは

「何で龍宮さんが…てゆうかなんであんな強いのに!?!」

「龍宮とはたまに仕事を一緒にする仲で…」

「なら最初から声をかけとくべきでしょう」

「いえ、いろいろとお金がかかりますので……」

「ってクーフエも想像以上に強いですね」

横で鬼達をぶっ飛ばしている

それから少し鬼達を減らしついると光の柱から鬼神が現れる

「ネギの奴間にあわなかつたの!？」

「わかりませんが……」

「助けに行かなければ」

しかしこいつら邪魔ですね……

「センパイ逃げるんですかあ？」

ドンドンッ

月詠に向かって銃弾が飛ぶが弾かれる

「行け刹那!!あの可愛らしい先生を助けに!」

「ここは私達に任せるアルよ!!」

「しかし……」

「行きますよ刹那」

腕を掴み連れていく

「アルト!!だけど……」

「あの二人なら大丈夫ですよ!!」

するとアスナと刹那に念話が入ったようです。

「アルトさん、今からネギ先生に召喚されますので捕まってください!!」

言われた瞬間

反射的に手を掴むと足下に魔方陣が現れて景色が変わる

後ろにネギ先生

前には鬼神ですか

それに小さな白い髪の少年

「ヴィシュ・タルリ・シュタルヴァンゲイド小さき王八つ足の蜥蜴
邪眼の主よ」

「何！？これは呪文始動キー！？こいつ西洋魔術師！！しかもこれ
は……姉さん奴の詠唱を止め」

「ダメです間に合わない」

「時を奪う毒の吐息を”石の息吹”」

刹那達と共に一時下がる

「なんとか逃げれた奴はまだこっちに気づいてません」

「しかし気づくのは時間の問題ですよ」

「大丈夫ネギ？ひどい死にそうじゃん」

「ありがとうアスナさん」

ネギ先生の手が少し石になってますね

すると刹那が

「……三人共今すぐ逃げてください。お嬢様は私が救い出します！お嬢様は千草と共にあの巨人の肩の所にいます。私ならあそこまで行けますから」

「でもあんな高い所どうやって」

アスナが聞くと

「ネギ先生アスナさんアルトさん……私……三人にも……このかお嬢様にも秘密にしておいたことがあります。」

そこで一旦区切り

「この姿を見られたらもう……お別れしなくてはなりません。」

「え……」

「でも、今なら。あなた達になら……」

バサッ

刹那の背中から純白の翼が現れた。なるほど先ほど感じたのはこれですか

「……これが私の正体奴らと同じ……化け物です。でもっ……誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！……今まで秘密にしていたのは……この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが怖かっただけ……！私っ……宮崎さんのような勇氣も持てない……情けない女ですっ……」

「……へえ」

「……ふうーん」

アスナと私は刹那の翼をさわると

「ひゃ」

モフッモフッ

サワサワ
クンクン
ギュウー

匂いを嗅いだり握ったり抱き締めたりしました

はわぁー暖かいです。

するとアスナが刹那の背中を叩き

「なーに言ってるんのよ刹那さん。こんな背中に生えてくんなんて
カッコイイじゃん」

「え……」

「ほらアルトをみてみなよ。凄い幸せな顔してるよ。」

モフモフ幸せ

「あんたさぁ…このかの幼なじみでその後二年間も影からずつと見
守ってたんでしょ。その間あいつの何を見てたのよ。このかがこの
位で誰かのことを嫌いになったりすると思う？ホントにもう……バ
カなんだから」

「あ…アスナさん…」

「行つて刹那さん！私達が援護するから。いいわよねネギ！アルト！」

「ええ勿論」

「は、ハイ」

「ほら早く刹那さん」

「……………ハイツ！」

バサッ

翼を広げて飛ぶ準備をする刹那

するとちょうど煙が晴れて

「そこにいたのか」

「アルトさん……………ネギ先生……………このちゃんのために頑張ってくれてありがとうございます」

そう言つてこのかに向かつて飛んでいく。

それを落とそうと少年が構えるが

「魔法の射手光の一矢!!」

ネギ先生が阻止する

「さてこれからどうしようか、カモ君」

《……坊や聞こえるか？坊や》

「「「!？」」」

この声はエヴァ!？

《フッフ…わずかだか貴様の戦い覗かしてもらったぞ……まだ限界ではないはずだ坊や意地をみせてみる!!そこにはアルトリアもいるんだろ!!ならそいつを中心にあと一分半持ちこたえられたなら私が全てを終わらせてやる!!》

「ネギ先生……行きますよ!!」

「ハイッ」

「OK!!」

「来るのかい?なら…相手をしよう」

「ハアッ！！」

斬りかかる

だが、すぐ後ろに回りこまれる。

だが、

「なめるなあ！！」

上体を無理やりひねり蹴りをよけまた斬りかかる。

「甘いよ」

それすらも受け止められるが…

「アンタもね」

アスナがハマノツルギで障壁を一回破壊する。

「へえ」

すぐにアスナを蹴り飛ばしネギ先生のほうに飛ばし空中に飛ぶ

「ヴィシュ・タルリ・シユタルヴァンゲイド」

詠唱を開始する

クソッあれはヤバイですね

「小さき王八つ足の蜥蜴邪眼の主よ」

「間に合え！！」

アスナたちを庇うために走る

「その光我が手に宿し災いなる眼差して射よ」

鞘を展開すると同時に

「ネギ」

アスナはネギを庇うように抱きしめ私はアスナを庇うように前に出た

「石化の邪眼!!」

魔法が放たれる

「全て遠き理想郷!!」
アウアロン

鞘の真名を開放する

すると何事も無かったように魔法が消える

「なに?魔法が消えた?なら……」

そう言つて殴りにくる少年

ヤバイ!!展開するのに咄嗟だった為か魔力を注ぎ過ぎて動けない

「まずは君からだ。アルトリア・ロア」

「クッ」

ガキイッ

「！」

ネギ先生が私の前で少年の拳を止めている

「アルトリアさん……大丈夫ですか？」

「ネギナイス！イタズラの過ぎるガキには……」

アスナがハマノツルギを振りかぶり

「おしおきよっ！！」

バキイッ

障壁が割れそこに

「兄貴今だ！！」

「うおおお」

ネギ先生のパンチが飛ぶ

「や……やったの？」

「……身体に直接拳を入られたのは…はじめてだよ。ネギ・スプリングフィールド」

すぐに殴り返そうとするが

ガシッ

少年の影から手が現れる

「うちのぼーやが世話になったようだな若造」

ドカンッ

湖の真ん中までぶっ飛ばす

「「エヴァちゃん（エヴァンジェリンさん）！！」」

「これで借りは無しだなぼーや」

急に湖の中にいた鬼神の周りに結界が張られる

空中を見ると茶々丸がいた

なるほど

彼女なら納得だ

「ぼーやよくやったよ」

エヴァの周りに蝙蝠が集まりマントとなる

「だがまだまだだな」

「いいか、このような大規模な戦いで魔法使いの役目とは究極的にはただの砲台！従者の守る間にでかいのを決める！！つまりは火力が全てだ！今から最強の魔法使いの最高の力を見せてやる」

そう言っ飛んでいくが空中で止まり

「いいな！よく見とけよ！私の力を！それとアルト。」

「何ですか？」

「付き合え。あれを完全に消滅させるからな」

「分かりました。」

風を纏い空を飛ぶ

まずエヴァが

「リク・ラクラ・ラックライラック契約に従い我に従え氷の女王来たれ」とこしみのやみ……えいえんのひょうが……」

鬼神を凍らせる

「次から次へとなんやなんやアンタ何者や!？」

エヴァがノリノリに

「くくくく、相手が悪かったなあ女……ほぼ絶対零度150フィート四方の広範囲完全凍結全滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐこと叶わぬぞ。我が名は吸血鬼エヴァンジェリン!《闇の福音》!!!最強無敵の悪の魔法使いだよ!!!アハハハハ」

さらに詠唱する

「全ての命ある者に等しき死を其は安らぎ也」

「な、なあ!!」

「おわるせかい」 フッ……砕ける」

パキイイン

鬼神が碎ける

後はあれを……

「消滅させる」

「後は任した」

「ええ、魔力放出」

最大の魔力を

「この一撃に……」

剣が徐々に姿を表し

そこに居るもの全てがその輝きに魅了される

その剣の名は

「
約束された《
エクス》勝利の剣」
カリバー

真名を開放し剣激が放たれ鬼神の身体は消滅した

修学旅行 その7（前書き）

すいません。更新が遅れました。

あともしかしたら後二回修学旅行編が入るかも……

修学旅行 その7

「アハハハハ！！バアカめ伝説の鬼神が知らぬが私の敵ではないわ！！」

高笑いするエヴァ

あれ？最後に決めたの私じゃありませんでしたか？

なに自分一人の手柄にしようとしてるんでしょう？

こっちは魔力が残り少ないのに真名開放までやらされたんですよ。

普通お礼があるでしょう。

そんなことを考えている間にエヴァがネギ先生のもとに降りていった

「どーだばーや私のこの圧倒的な力しかと目に焼きつけたか？ん？」

「すごいよエヴァちゃんやるじゃん！最強とか自慢しただけあるわね見直しちゃった！」

アスナも私を無視ですか……

「アルトも凄かったよ!!」
その一言が聞こえた瞬間

ガシッ

アスナのもとに行き手を握った

「ありがとうございます。アスナ」

「え？う、うん……」

なんて感動しているとネギ先生が……

「で、でも登校地獄の呪いは？」

「あ！そーよ学園の外に出られないんじゃないの？」

「ですが……」

茶々丸が説明する

「協力な呪いの精霊をだまし続けるため、今現在複雑高度な儀式魔

法の上、学園長自らが五秒に一回《エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である》という書類にハンコを絶えず押し続けています。準備に時間がかかってしまい申し訳ありません」

頭の中にハンコを書類に押し続けている学園長を思い浮かべ、少し笑った。

「で、今回の報酬として明日私が京都観光を終えるまで、じじいにはハンコ地獄を続けてもらう。こんな機会もつないからな！」

「五秒に一回つて……学園長大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないですか？」

少し投げやりに答える

「ふん！この事件のそもそもの原因はじじいの見通しの甘さにある！この程度の苦労当然だ。」

「登校地獄の呪いと学園結界から逃れた今の私の力はほぼ全盛期と同等。反則気味の最強状態という訳さ。ふふ……久々に全開でやれて気持ち良かったよーや」

「ならあの鬼神を最後までちゃんとやりなさいよ!!只でさえ少ない魔力を大半消費してしまったんですよ。明日は1日寝ていたです……」

と言うと

「なに、アルトにも見せ場を作ってやろうと思ってな……」

ネギ先生の方に

「それといいかばーや、今回のことを私が暇な時にやっている日本のテレビゲームに例えるとだな。」

微妙な例えですね……

「最初の方の洞窟とかで死にかけてたらなぜかラスボスが助けに来てくれたようなものだ。次にこんなことが起こっても私の力は期待出来んぞ。そこん所をよく肝に命じておけよ。」

「は……………はい……………」

つらそうに答えるネギ先生

何かに気づいたみたいですね。何でしょう？

エヴァの方を見ると後ろに水溜まりがあった。

「む……さすがにキツそうだなばーや、大丈夫か？」

ズ……

「エヴァー!!」

水溜まりから白い少年が出てくる。あれはヤバいですね。

私はエヴァを抱きしめて庇う

「なっ何？ちよつアルト!!／／／／」

何顔赤くしてるんですか？エヴァ

「障壁突破”石の槍”」

グサッ

「ッ……」

腹を石の槍が貫く。

鎧無視ですか……

痛いですね。

「貴様ツ!!」

エヴァが怒った

「エヴァンジェリンを狙ったつもりだったが……」

「アルトリアさん!!」

「アルト!!」

ネギ先生とアスナが声をあげる

「許さん!!」

手に魔力を込め放つ

「……成る程、相手が吸血鬼の真祖では分が悪い。今日の所は僕も

退くことにするよ……」

逃げましたか……

それにあれは

「幻想か……」

「そうですねエヴァ」

「アルト大丈夫なのッ!？」

「ええ、大丈夫ですよ。」
腹は痛いですが

「じゃなくて今岩がグサーってお腹に刺さって血がドバーって」

「ええ、そうですね。まあ治療の道具を持っていますから大丈夫ですよ。」

「よかった……アルトリアさん」

ネギ先生のほうこそ大丈夫ですか？

ドサァ、ゴトッ

「ど、どど、どうしたばーや！？」

「ネギ先生！？」

「大丈夫ですか！？」

「ネギ、ちよつとッ」

「兄貴ッひでえッ右半身が石化を……」

すると遠くから

「ネギくーん」

「ネギ先生！」

「このかに刹那ですか」

「ネギが！！」

「どうしたでござるか！？」

「楓さん！ユエー！！」

楓が何でいるの？

茶々丸がネギ先生の容態を見る

「ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎるため、石化の進行速度が非常に遅いのです。このままでは首部分まで石化した時点で呼吸ができず窒息してしまいます」

「……………どうにかならないのエヴァちゃん！！」

「わっ…私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。不死身だから」

おろおろしながらエヴァが答える

「そんなッ……………ならアルトは！？さっき治療の道具があるって言うてたよねー！！」

「あることにはありますが……………今これを渡すと私が死にます。」

出血多量で……………

「昼に着くっていう応援部隊なら治せるだろうが……間に合わねえッ」

「お嬢様……」

「うん」

「あんな……アスナ……」

「え？」

「ウチ……ネギ君にチューしてもええ？」

別れのキスですか？

「なっ何言ってるのよこのか、こんな時に!!」

「あわわ、ちゃうちゃうあのホラ、パ……パクテオーとかいうやつや」

「え……」

「みんな……ウチせつちゃんに色々聞きました。……ありがとう。今日はこんなにたくさんの方のクラスみんなに助けてもらって……ウチにはこれくらいしかできひんから……」

「……そうか！仮契約には対象の潜在力を引き出す効果がある。このか姉さんがシネマ村で見たあの治癒力なら……」

ネギ先生が助かるかもしれませんね

「ネギ君………しっかり」

ネギ先生を中心に光が

「ん………このか………さん？」

ネギ先生が目を覚ました

「よかった………無事だったんですね………」

「「「ヤッター」」」

皆が喜ぶ

「おや？」

「どうしたアルト？」

「いえエヴァ、ただ私の傷も治っているので……」

そうしてとりあえず総本山に戻った

戻って一夜あけて

「……朝ですか」

ウン

体を伸ばし目を覚ます。

すると障子越しに

「従者から連絡が入った。全て解決。主犯は後で引き渡すよ」

「何から何までありがとうございます。エヴァンジェリンさん」

この声……刹那にエヴァですか

「ネギ先生とアルトさんはぐっすりとお休みのようですね。」

「まあハードな一夜だったからな。だがアルトが寝ているのは……私が頼んだ最後の止めのせいだろ。魔力切れで最後戻って来たら倒れたからな」

「おい、もう行くのか？せめて別れの挨拶くらい……」

「……………顔を見れば辛くなりますから……………」

やれやれ

「冷たいですね刹那……………」

ガラッ

障子を開けながら言うと

「アルトさん……………」

「さん付けですか……………刹那、私の呼び方を一定にしてくれませんか？……………友達として……………」

「友達……ですか……ありがとうございます。アルト」

「ええ、どういたしまして。」

「では、」

そう言って去ろうとする刹那

すると

バンッ

後ろの障子が開き

「刹那さんっ!!」

ネギ先生が現れた

「どこへいつちゃんですかっ!!?このかさんはどーするつもりな
んですかっ?」

「い、一応一族の掟ですから……あの姿を見られた以上仕方ないのです……」

「お嬢様を守るという誓いも果たし神鳴流に拾われた私を育ててくれた近衛家へ御恩も返すことができました。あとのことはネギ先生とアルト……よろしくお願いしますっ」

そう言い終わると走り出した

「あっ!!」

ガバーッ

と抱きつき止めようとするネギ先生

「ダメですよ刹那さん！僕だってみんなに正体バラされたらオコジヨにされちゃうんですから　っ」

「それにそんなこと言ったらエヴァンジェリンさん吸血鬼だし茶々丸さんもロボなんですよー!!」

「マスターお茶が入りました。」

「うむ」

「茶々丸私も貰えますか？」

「はい。」

「だから刹那さん自分でこのかさんをこれからもずっと守ってくださいよ！！」

「そんな無茶なあなたそれでも先生ですか！？」

「刹那さんに言われたくないですー！！」

「そりゃ私だつて去りたくないです……せつかくお嬢様と……」

「じゃあいればいーでしょ！アスナさんだつていい友達ができたって喜んでたのに」

「若いっていいよな」

「そうですね」

「イキナリ老け込まないでくださいマスター、アルトさん」

「しかし……」

ああ、まだ言い合ってるんですか

トトトトトトトトトト

「せつちゃんせつちゃん大変や　　！！」

「大変よ刹那さん！！！」

「「ぶげらっ！！！」」

アスナ…このか…イキナリドロップキックはないでしょう……

「なななっ…何事ですか！？」

「実は3-Aの旅館に飛ばした私達の身代わりの紙型が大暴れしてるらしいのよ」

「えええ　　っ！？」

………私のもですか？

「おっここにいたか桜咲、アルト！」

「ネギ坊主ホテル嵐山へ急行するアルよ！」

「荷物の準備できました」

「ホラ刹那身代わりはお前の専門だろ」

「せつちゃんはやー」

「何ボーツとしてんのよネギ」

「……刹那さん……僕達黙ってますから……」

「早く行きますよ刹那」

「……仕方ないですねもう……ありがとうネギ先生……アルトさん……」

「……アルト……さん……？」

「……アルト」

「よろしい、じゃあ行きましょう。」

「わかりました。行きましょうお嬢様!」

「あんもーせつちゃん。このちゃんて呼んでー!」

「えっ……いえそのクセで……すいませっ……」

「ホラ早くあんた達!!置いてくわよーっ」

「あ、僕着替えがまだ」

「私も、着替えなくては……」

そうしてホテルに戻って行った

修学旅行 その7（後書き）

誤字、脱字、アドバイスが合っ
たら教えてください

修学旅行 その8（前書き）

長いこと放置していてすいません……

ようやく漫画を返して貰えたので早速更新です。

後前の話にちよつと追加をしました。

これで修学旅行編ラストです。

後後書きにアンケートを載せて置いたので答えてくれると嬉しいですよ。

修学旅行 その8

嵐山のホテルの五班の部屋

「はー、疲れましたねー」

ネギ先生にアスナ、このかに刹那、そしてアルトが寝転がっている

「……でもこうして嵐山の旅館で寝転がっていると昨日のことって何か夢みたいだね」

「ふふ……そうですね傷も消えてしまいましたし……アルトはいつまで寝てるんですか？」

「……昨日は魔力を消費しすぎたんです。」

誰かのせいで、真名解放を使うはめになったんですから

また、沈黙が続きしばらくして

「……いい天気、平和が一番やなー」

「くす、ホントね」

チョン

ネギ先生がアスナの手をさわる

「あ……」

「ん……？」

「……っと、ごめんなさいアスナさん」

「んん？」

「コオラネギ、今さら手触ったくらいで何謝ってんのよ。バカねー
ガキのくせに裸だっ見てるでしょ」

それを見てこのかは

「へへっウチも」

「わっ？あ、あのこのちゃん？」

刹那の手を握る

「…せっちゃんウチのためにいろいろ……ありがとな」

「いつ……いえそんな……お嬢様……」

「またお嬢様てゆう」

「あ、ごめんなさ……」

肩身が狭いですね……

刹那に抱き着いて見ますか

ギュッ

「／／／ツ……！何をするんですかアルト……」

「ん……？暖かいですね刹那……良く寝れそうです……」

顔を背中に埋める

「／／／ちよっ……やん……息が……当たる……」

このか達の顔が赤いですね

まあ良いですか……このぬくもり……気持ちいいです

あー、いい感じに眠気が……

バンッ！！

「コラ起きろーっ！！ぼーやとその他！！」

ビクッ

エヴァが急に入って来た

「今日は私の京都観光に付き合っ方がいい！！」

「ええー長さんとの待ち合わせはまだ……」

ネギ先生が反論するが

「だからそれまで観光すんだろホラ起きろ！図書館の三人は付き合
つてくれるそうだぞ！まずは清水寺だ！！」

テンション高いですねエヴァ

え？刹那ですか？

エヴァが入って来た瞬間に腕の中から居なくなりました。

残念です。

とりあえず

「エヴァ、私は寝かせて貰っていいですか？」

「黙れ。反論は許さん。行くぞ！！」

そこから二度目の清水寺に行った。

そして約束の時間になり長の所に行く

「やあ皆さん、休めましたか？」

「どうも、長さん！」

「この奥です、三階建ての狭い建物ですよ。」

「ねえねえどこ行くの？」

「何でもネギ先生の父親の別荘に」

知らなかったんですかパル

「長さん……小太郎君は……」

ネギ先生が長に聞いた。

小太郎って誰ですか？

「それほど重くはならないでしょうがそれなりの処罰があると思います。天ヶ崎千草についても……まあその辺りは私達にお任せください」

「それより問題はあの白髪のカキか……」

エヴァが聞く

見た目は両方ガキですよ

「アルト……何か言ったか？」

「いえ、なにも……」

考えが読めるのですか？

「現在調査中です。今の所彼が自ら名乗った名が“フェイト・アーウェルンクス”であることと……1ヶ月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修として派遣されたということしか……おそらく偽称でしょうが……」

「ふん……」

そんな会話をしている間に木の間から一件の家が見える

「なんか秘密の隠れ家みたいねー」

「10年の間に草木が茂ってしまいましたが中はきれいなものですよ。どうぞネギ君」

中に入ると本がたくさん壁に並んでいた。

「スゴイ本がたくさん」

「彼が最後に訪れた時のまま保存しています。」

「ここに……昔父さんが……」

キャツキャツ

パル達が本を取るために脚立を登り始める

「オイ、いいのかアレ？」

「素人目に何の本かわからないでしょう。お嬢様方故人の物ですからあまり手荒には扱わないでくださいね」

それから思い思いに行動していたら上で父親の手がかりを探していたネギ先生と一緒にいた長から

「このか、刹那君こつちへ……アスナ君とアルト君も……あなた達にも色々話して置いたほうが良いでしょう。」

そう言われ上にあがるあと一枚の写真を見せられた。

「……この写真は？」

「サウザントマスターの戦友達……黒い服が私です。」

見ると若い長らしき人物を含めた六人が写っていた

「戦友？」

「ええ20年前の写真です」

「わひゃーこれ父様？わかい」

「私の隣にいるのが15歳のナギ……サウザントマスターです。」

真ん中にネギ先生をちよつと成長させたような少年が写っていた

「……………父さん」

「へーどれどれ？どれがネギのお父さんなの？」

「この人やてかつこえー、ええ男やー　ネギ君こうなるんな」

「……………」

エヴァ無言で良く見ようとしてません？

「え……………」

「どうかしましたかアスナ？」

ボーッとして

「うつんなにも」

「私はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした……そして20年前に平和が戻った時、彼はすでに数々の活躍から英雄……サウザントマスターと呼ばれていたのです。」

アスナとこのかがよく分かってない顔をしていますね……

「天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。彼女の西洋魔術師への恨みと今回の行動もそれが原因かもしれません」

「……なるほど」

「以来彼と私は無二の友であつたと思います。しかし……彼は10年前、突然姿を消す……彼の最後の足取り、彼がどうなったのかを知る者はいません。ただし公式の記録では1993年死亡……それ以上のことは私にも……すいませんネギ君」

「いえ、そんなありがとうございます。」

「結局手がかりなしか、残念だったな兄貴」

「うっん、そんなことないよ力モ君。父さんの部屋を見ただけでも来た甲斐があったよ」

「ネギ君実はこれなんだがね…」

「え？」

長が丸めた古い紙をネギ先生に渡すと朝倉が

「ハーイそつちのみなさん難しい話は終わったかな？記念写真撮るよー下に集まって」

「記念写真ですか？」

「そーそー忘れてたの他ね班はもう撮ってたよ。」

「わ、私は良いぞそんなもん」

「エヴァも一緒に撮りましょうね」

「あっアルト、貴様！頭をつかむな！！」

それから全員で記念撮影をし京都駅に向かった

「ハイ皆さんこの後私達は午前中のうちに麻帆良学園に到着、その後は学園駅にて解散、各自帰宅となりまーす。皆さん修学旅行楽しかったですか」

「『ハイノイエー』」

元気ですね。

「ネギ先生ー先生も締めの一言お願いしまーす」

「あ、ハイ」

ガッ

自分の鞆に足を引っかけて転ぶネギ先生

「『アハハハ』」

「全く、昨日とは別人ね…」

帰りの新幹線のなか

3 - Aのメンバーは全員寝ていた。

教師達が寝ている生徒達に毛布をかける

「やれやれ、あれほどうるさかった3 - Aが静かなものですな。」

「ふふホントに…ハシヤギ疲れたんでしょうね」

それから一列の生徒をみて

「あら……見てくださいあの三人……ぐっすり眠って…ふふ、桜咲さんモテモテね」

そこには

アルト、刹那、このかの順に座りアルトとこのかが刹那の肩にもたれかかりながら幸せそうに寝ている姿があった

「まるで恋人達みたいですね」

「いやあ、まだまだ子供ですよ。アルトリア君は女子に混じっても違和感がないからどちらかと言えば姉妹ですな」

そうして修学旅行は終わった。

修学旅行 その8（後書き）

アルトリアの仮契約相手とアーティファクトのアンケートをしたい
と思います。

仮契約相手はの中から

エヴァ、ネギ、このかの三人から選んでください。

アーティファクトは能力、名前、外見などを読者の皆さんが考えて
くれると嬉しいです。

締め切りは、まだ未定ですができる限り早めに答えてくれると嬉し
いです。

あと、感想、誤字脱字があれば教えてください。

では、また次回

帰ってきて（前書き）

刹那がモテます。

あと今アンケートを募集中です。

内容はアルトの仮契約相手をエヴァ、ネギ、このかの三人の中から一人

そしてアーティファクトの能力、名前、外見を読者の皆さんが考えてくれると嬉しいです。

帰ってきて

帰ってきて一夜あけて日曜日

「エヴァ、まだ花粉症治らないんですか？」

「そんな簡単に治るわけ無いだろ！ー！ぐすぐす」

「余り鼻をすすらないほうが良いですよ。」

「うるさいなあ」

なんて、会話をしていると

コンコン

ノックの音がした

「茶々丸出てくれ。」

「はい、マスター」

ドアをあけ出迎えに行った

「誰でしょうかねエヴァ？」

「知らん……」

「マスター、お客様です。」

「「お邪魔します。」」

ネギ先生とアスナが現れた。

「こんにちはアスナ、ネギ先生」

「ちゃーすアルト」

気楽ですね。

「ここに来たってことはエヴァに何か用ですか？」

「はい。」

「ふうーん、その用件はなんですか？」

「エヴァンジェリンさん。僕を弟子にしてください。」

正座しながらお願いするネギ先生

「何？私の弟子にだと？アホか貴様。」

凄い用件ですね。

エヴァもいきなり否定ですか…

「一応貴様と私はまだ敵なんだぞ！？貴様の父サウザンドマスターには恨みもある。大体、私は弟子など取らんし、戦い方などタカミチにでも習えばよろう。」

「それを承知で今日は来ました。タカミチは海外に行ったりして学園にいないし……何より京都での戦いをこの目で見て魔法使いの戦い方を学ばならエヴァンジェリンさんしかいないと！」

あ、今エヴァピクッて反応しましたね

「……ほう、つまり私の強さに感動した…」と

「ハイ！」

「……本気か？」

ニヤニヤしながら聞かないでくださいよ。

「ハイ!!」

ネギ先生も少しは考えよう。

「フン……よからうそこまで言うならな」

「え」

「ただし……！ぼーやは忘れているようだが……私は悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにものを頼む時にはそれなりの代償が必要だぞ……
…ククク」

「「ん？」」

何か嫌な予感が…

ネギ先生に向かって足を向けるエヴァ

まさか…

「まずは足をなめろ。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ。」

「あほかーッ！！」

「へぶう！？」

アスナがハマノツルギで突っ込む

凄いなあれ、エヴァの障壁簡単に壊したよ

「何突然子供にアダルトな要求してんのよ！」

「あああ、貴様、神楽坂アスナ！！弱まってるとは言え真祖の魔法障壁をテキトーに無視するんじゃないっ！！」

涙目で反論するエヴァ

「それにエヴァちゃんネギがこんな一生懸命頼んでるのにちょっとひどいんじゃない!？」

それにしても今日のアスナはやけにネギ先生の肩を持ちますね

「頭下げたくらいで物事が通るなら世の中苦労せんわ!!ハン……それより貴様……何でばーやにそこまで肩入れするんだ?身内でもないのに。やっぱりホレたのか?10歳のガキに」

「／／／なっ!？」

え?そうなんですかアスナ

「ちっ違うわよ。ネギは子供なのよ!!」

「ははは、どうした耳まで赤くなってるぞ。カワイイじゃないか神楽坂アスナ」

「ち、ちがつ私はただ…」

「ムキになって否定とは、ハハハつまり凶星か!？」

「違うーっ!!」

「はぶあっ」

あ、またハマノツルギで突っ込んだ。

「き、貴様二度もハタいたなー!!」

「う、うるさーい取り消しなさいよこのへボ吸血鬼!!」

「なんだとーっ!!」

「ああああ?」

ネギ先生怯えすぎです。

「マスターに物理的な突っ込みを入れられるのはアスナさんだけです
ね」

茶々丸……そういう問題ですか？

もうそろそろ止めないと

「あ、あのー」

二人の動きが止まる

「わ…わかったよ。今度の土曜日もう一度ここへ来い。弟子に取るかどうかがテストしてやるそれでいいだろ？」

「え……あ、ありがとうございます！」

そう言っつてネギ先生達は帰った。

「珍しいですね。エヴァが折れるなんて」

「たまにはな……」

「へえ、私ちよつと刹那のところに行つてきますね」

「……夕食までには帰れよ」

「了解」

女子寮の刹那の部屋に向かうと

「刹那くいますか？」

ガチャ

「なんですかアルト？」

「いや、暇だったもんで」

「私、今からお嬢様の所へ行こうかなと考えていたんですが……」

「ならついて行ってもいいですか？」

「良いですよ。」

そうしてこのか達の部屋に向かう。

「いらっしゃいっせつちゃんにアルト君」

「失礼します。」

「お邪魔しますね。」

周りを見ると

「意外ときれいですね…」

「どんな部屋を想像してたん？」

「いえ、アスナがいるからちょっと散らかってるかな〜と思いました
て」

「アハハ、アスナが聞いたら怒るえ〜」

「ええですから黙っててくださいね。刹那も」

「仕方ありませんね。」

「しゃーないな。」

「ハハ、ありがとうございます。」

「せっちゃん、アルト君なに飲む？」

「なんでもいいです。」

「すいません、紅茶で」

「紅茶かぁ……そや！確かネギ君の机に……」

ロフトに上がって行くこのか

何があるんですか？

「あつた！紅茶の葉っぱ。」

「なぜそんな所に？」

「ネギ君がよう飲んどるからなあ」

ああそこネギ先生の場所なんですか……

「どれが良いかこっちきて選んでや。」

上にあがってみると

紅茶の種類が結構な数あった。

「では、これで」

ライチティーを選びふとネギ先生の机に目が行った

「なんでしょうかね？このチョコ」

「わからんなあ。」

机の上にチョコがあった。

「一つもらって良いですかね？」

「いいんとちゃう？私も一つもらおう。」

そうして一つずつ食べて、下に降りて行った。

「決まりましたか？」

あれ？刹那ってこんなにカッコよかったですか？

「／／／ええ、一樣」

ま、まともに顔が見えません。

「どうしたんですアルト？熱でもあるんですか？」

顔を近づけて熱を測ろうとする刹那

も、もう

「刹那」

「え？」

「好きです。」

そう言って押し倒した。

「／／／なにをするんですか！？」

「せつちゃん……ウチも……」

「お嬢様!？」

「ああーん、せっちゃん好き好き好きや」

「私も……刹那……あなたが好きです。大好きです。」

「／／／な、なにを」

そんな刹那に助けが来た

「「ただいま。」」

リビングにネギ先生とアスナが現れた

「ああっネギ先生アスナさん助けてください」っこれは一体!？」

「多分二人は僕の机にあったチョコを食べちゃったんですよ。」

「そのチョコを食べて最初にみたやつに一目惚れする効果のな、まあ効果時間は半日程度だが」

カモが説明してくる。

「え？それじゃあ」

「あと半日はそのままです。」

「ええええええ！？」

それから半日の間ずっとアルトとこのかに抱きつかれたままの刹那
なのでした。

帰ってきて（後書き）

誤字、脱字、アドバイスがあったら教えてください

ゲームして、修行して（前書き）

アンケートの締め切りは今週の土曜日にします。

皆さんのアイディアを教えてください。

それと今回は会話が八割しめてます。

状況描写？なにそれ？

状態です。

苦手な人は読まないほうがいいです。

あまりこれからの本編に関係ありませんので

ゲームして、修行して

エヴァ家

「フハハハ、私のこのコンボ抜け出してみせる!!」

ハイ、今私はエヴァとゲームをやっています。

「言われなくても……」

この吸血鬼……じゃなかったエヴァが私が刹那と修行の約束の時間まで暇だろ、と決めつけ無理やりやらされています。

「そらそらそら!!どうした?体力がもう半分を切ったぞ?」

負ける訳にはいきません!!

「今です!!『極光壁』」

「なんだと!?そうか、確かその技を出す条件は……」

「ええ、体力が赤くなること……まだまだ行きます。『極光剣』」

どんどん相手の体力を削って行く

「だが『極光剣』は体力が残り1になるまでやり続けなければいけない……この技が終わった後はアルト……お前の最後だ!!」

「いえ……この時点で私の勝ちは決定しました。」

「なんだと……もうすぐ終わるじゃないか!？」

「アイテムのグミを使用し、体力を回復!!」

「な、なんだと!?!……『極光剣』は続いているだと!？」

「体力が無くなるまでやるなら体力を無くさなければいいんです。」

そうして私は勝ちました。

何のゲームかって？

技の名前と回復アイテムがグミってヒントで想像してください

「じゃあ次に私はこいつを使う。」

「あ、もうこんな時間が……暇潰しで始めたのに……時間がたつのは早いですね。じゃあエヴァ、私刹那と約束がありますからちよつと行ってきますね。夕食までには帰って来ますから」

「勝ち逃げか……まあいい。帰って来たらもう一度だからな!!」

「ハイハイ。」

そうして世界樹広場に向かった。

「アルト〜こつちこつち」

アスナが手を振ってきた。

「アスナどうしてここへ？」

「刹那さんが剣道教えてくれる約束してたからさ。」

ああ、あの鬼に囲まれた時ね。

「さあじゃあやりましたようアルト!!」

テンション高いですね刹那……

「とりあえず話を纏めると私は刹那の剣の練習に付き合って、アスナの剣の練習は刹那がみると……」

「ええまあそんな感じです。」

「じゃあ私もアスナの練習に少しは手伝いましょう。」

「ホントに!？」

「ええ」

「ありがとアルト」

「さて、じゃあまずは走り込みから始めますか……」

「ハアイ」

「刹那もね……」

「ハイ」

「じゃあ女子中エリア一周しようか？」

「「え？」」

「ハイ、ダッシュー!!」

一時間後

「ハアハアハア……」

「息きれすぎですよアスナ」

「フウフウ……」

「まあ刹那も多少体力が足りませんね」

「……どうして……あんた……息ぎれ、一つ……しないのよ……」

アスナが聞いてきた。

「これぐらいなら余裕ですよ。さて、休憩終わり。次は木刀で素振りでもしましょうか」

「「……………」」

二人とも無言で頷くだけだった。

「まあ漠然に素振りっていつでも余り上達はしません。最初のうちはそれで良いかも知れませんが刹那ぐらいのレベルなら相手を意識して素振りをしなさい。」

「……………私は？」

「アスナは刹那をみて振り方、動き方を学びながらやったら良いでしょう。分からない事があつたら刹那か私に聞きなさい。刹那………あなたは相手のイメージが湧きにくいと言うならまず私とこの木刀

で模擬戦しますか？」

「いえ、とりあえず月詠のイメージがまだありますから」

「そうですか……じゃあ始めましょう」

素振り始める二人

私はなにをしましょうか？

素振りでもしますか……

「……」

45分後

「アルトくなんかイメージが狂ってきた。」

「私事です。」

「じゃあ軽く打ち込みをやりましょうか……アスナはハマノツルギ、刹那は夕凧で……私が木刀を構えますからとりあえず打ち込んで来てください。」

「じゃあ私から」

「アスナからですか」

それからさらに一時間後

「じゃあ今日はここまでで。」

「あ、刹那さん、このかが今日の晩御飯うちでどう？だって。」

「いただきます。」

「アルトはどうする？」

嬉しい誘いなんですけど……

「エヴァが待っているので帰ります。」

「じゃあね〜」

「さようなら」

そうして今日の一日は終わった。

弟子入りまで その1（前書き）

アンケートよろしく願いします。

活動報告のほうにも書いてありますので

弟子入りまで その1

「おい、アルト。起きろ」

「……うゝ、なんですかエヴァ？」

まだ午前4時ですよ

「ふと、目が覚めたからな……散歩に行くぞ」

「行つてらっしゃい」

「お前もだ。」

うにゃあああ

寝たいですゝ

「分かりましたよ。着替えるから少し待っててください。」

着替えが終わり散歩に行く

早朝のためか誰ともすれ違わない。

「エヴァ」

「なんだアルト」

「どこに行くんですか？」

「世界樹広場にばーやの魔力の気配がするからな」

ああ、会いに行くと……

それから15分ぐらいたって世界樹広場に近づいていくと

パシンッ

パシン

何か音が聞こえて来ました。

足運びの音でしょうか？

「エヴァ。ネギ先生かも知れませんね？」

「そうだな。」

世界樹広場の階段を登って行くとネギ先生とまき絵がいた

「ね、ね、今のもっかいやってよ。」

「あ、はい……」

会話が聞こえる距離まで近づく

と

「フン……カンフーか……ずいぶんと熱心じゃないかぼーや」

「おはようございます。ネギ先生、まき絵。」

「あれー？エヴァさま茶々丸さん、アルト君おはよー。」

「あ、おはようございます！お仕事ですか？」

「残念ながら違います。ただエヴァが早く目が覚めたらしく、散歩に付き合ってるだけです。」

「カンフーの修行をすることにしたのか？じゃあ私への弟子入りの件は白紙ということでもいいんだな。」

むすっ…とした顔してる

「えうつ！？」

エヴァ……ヤキモチですか？

まき絵……さまって……下僕になった時の記憶があるんですかね？

「あつ、いえ、これは、そのつ……あの少年の戦い方の研究でつ…」
アワアワしながら言い訳をするネギ先生

……ネギ先生何か悪いことしましたっけ？

「いーよ別に、元々私は弟子など取るつもりなかったしな」

「あわわ違っんですーっ！！」

「どゆこと？ネギ君」

「えとあのつエヴァンジェリンさんの弟子にしてもらうつもりだったんですけどーっ」

「じゃあな。ま、子供にはカンフーごっこはお似合いだよ。」

「あつ……待ってくださいーいつー!!」

「「……ヤキモチですか？エヴァ／マスター」」

茶々丸と声が揃ってしまった。

「なつ……ち、ちがうわっ!!」

あわてて否定するエヴァ

それだけ否定的とかえって照れ隠しだと思われますよ。

「ちょっとーエヴァちゃん何でネギ君にイジワルするのー？弟子にくらいしてあげればいいーのに。なんの弟子が知らないけど」

「ヤキモチだそうです。」

「ソナナ気二入ッテンノカアノガキ」

茶々零……私の頭の上で喋らないでくださいよ……

「ちがうっつーのコラー!!」

ああ、エヴァ。照れ隠しに私の首もとを持って揺らすの止めてくれないませんか？

「フン子供の遊びに付き合う趣味はないんだよ。お前みたいな子供っぽい奴と話すのもな佐々木まき絵。」

子供っぽいって単語が気になったのか

「な…何よー！！エヴァちゃんだってお子ちゃまみたいな体型じゃん！！ふーんだ、いいもんねーネギ君”あーんなに”強かったんだもん！！エヴァちゃんなんか教えてもらわなくてもすぐに達人だよーだ！！」

「ぬ…（こいつわずかに記憶があるのか？）もと下僕のくせに………いいだろう。たった今貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ」

おや、なんか怒りに任して決めてません？エヴァ

「そのカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れてみるがいい。それで合格にしてやろう……ただし一對一でだ。」

「いーよ わかった！！そんなのネギ君なら楽勝だよー」

「ま、ま、まき絵さん！？」

災難ですネギ先生

「もんでやれ茶々丸」

「ハ、しかし…」

「いいから行けケガせん程度でいい。」

「ハイ、失礼しますネギ先生」

茶々丸が一瞬にしてネギ先生との距離を詰める。

そして右の手刀でネギ先生の体制を崩し蹴り飛ばす。

「はぐっ」

ドカアッ

「あ！ネギ君っ」

これだけで終わった。

「茶々丸に一発も入れられないようならどの道貴様に芽はない。場

所はここ時刻は日曜日午前0時にまけてやる。ま、せいぜいがんばることだな。」

私と茶々丸は一礼してからその場をさる。

「ネギ!？」

「ネギ坊主!？」

「ネギ先生!？」

アスナに刹那にクーフエですか……早めに去りましょう……見つかつたらうるさいでしょうし……

「ちよつ大丈夫何があつたの？」

「しかりするアル」

そんな声を聞きながら私たちは家へ戻った。

「エヴァ、悪いですけど今回は私ネギ先生の方を応援させていただきますね。」

「ん？なぜだ？」

「面白くなりそうですし……」

「まあぼーやに直接指導しないなら別に良いぞ。今回だけな……」

「ありがとうございます。エヴァ」

そうして朝食を食べ、学校に行く準備をする
その日の放課後

世界樹広場

さっそくカンフーの修行を始めるネギ先生

「ネギ坊主は恐ろしく飲み込みが早いし才能もある思うが……2日
だけではどうにもならんアルよ」

クーフエとカンフーで戦っているネギ先生

その間に私はアスナたちに何が合ったかを説明する

「じゃあエヴァちゃんとこの弟子いりはダメってこと？」

「ネギ先生は格闘については素人ですから……」

「しかし、魔法を使えばどうにかなるかも知れませんか？」

そんな会話をしているとまき絵が走ってきた。

「ネギくん お弁当たーくさん作ってきたよー」

「えっ！？ありがとうございます！？」

「凄い量ありますね。」

「あれ？アルト君エヴァちゃん側じゃないの？」

「いえ、今回はこちらに着くことにしました。迷惑でしたか？」

「いえ、そんなことは！！」

とか言ってる間にどんどんお弁当が広げられていく。

「勝負に勝つにはまずスタミナつけなきゃね」

「「わーおいしそー」」

ネギ先生にアスナ……そんなにお腹減ってたんですか？

「でしょでしょ料理は得意なんだ。たくさん食べてー」

「いっぱい作たアルねー」

「重箱が1、2……18箱！？作り過ぎじゃ無いですかね？」

そして無理やり食べきった結果

ネギ先生が太ってしまった

「よ……余計弱くなてしまったアル……小太りカンフーファイターアル」

「えっ……？」

良くあの短時間で太りますね

「い、ごめんネギ君」

「大丈夫デフよ」

「普通に喋れない時点で大丈夫じゃ無いでしょう…」

「でも、大丈夫だよ！！我が部に伝わる秘密のダイエット術で！」

そう言っただけの中からいろいろ取り出すまき絵

「全身にラップをぐるぐる巻きにして、その上に毛布三枚かぶって、
んで学園サウナで三時間……」

「いや！死にますよソレ！？」

結果

「あああさらに弱く……」

「いやああ〜ん！？」

もとより痩せてしまったネギ先生……大丈夫なんですか？

「ハハハ、大丈夫ですよ。」

見た感じフラフラなんだが

「ホンツツにごめんネギ君私のせいで。手伝おうと思ったのに迷惑かけちゃって……」

「大丈夫ですってまき絵さん」

「でも日曜日まであと2日しかないんだよ……あれ？日曜日？」

「日曜日に何かあるんですかまき絵？」

「あーっ忘れてた！！私も日曜日に大会の選抜テストあるんだっただけ……」

「えーっ！！大丈夫なの？」

「それがその……そっちの方も全然自信なくて……」

落ち込むまき絵

「えーどうして」

「私の演技子供だって先生が……ネギ君にも迷惑かけちゃうしもう」

私だめ……」

沈黙の空気

そのなか口を開いたのはクーフェだった

「何いつてるアルかーっ！？バカピンク」

「らしくないわよ。」

「元気出し」

「元気じゃないまき絵はまき絵じゃないですよ。」

「そつだ！まきちゃんの新体操見せてよ！！リボンがいいな」

「ええっ！！そんなのダメだよー」

「いいじゃん見せて見せて」

「でもっ……」

「あ……僕もみたいです。まき絵さんの新体操って見たことないし

…」

「う…ネギ君……じゃあちょっとだけね……」

新体操の準備をするまき絵

さて、

「刹那すいませんが今日は帰りますね」

「え？見ていかないんですか？」

「見たいのは山々なんですが……まき絵……スカートでしょう？」

「ああなるほど……分かりました。皆さんに伝えとけばいいんですねアルト」

「ええ。それでは」

「おやすみなさい。」

そして私は家に帰ってエヴァと一緒にゲームをして

今日を終えた。

弟子入りまで その1（後書き）

感想、誤字脱字があれば教えてください。

弟子入りまで その2（前書き）

12月11日土曜日までアンケート募集しています

内容はアルトの仮契約相手をエヴァ、ネギ、このかの三人の中から一人

とアルトのアーティファクトの名前、外見、能力を募集しています。

皆さんが考えたアーティファクトを教えてください。

弟子入りまで その2

次の日の朝

「朝早く失礼します。」

刹那が家に来ました。

「どうしたんですか？刹那。こんな早くから」

ちなみにエヴァはまだ寝ている……私もついさっき起きたばかりのためまだパジャマ姿だ

「いえ、もうすぐアスナさんの配達が終わる時間ですので朝から練習したいと思ったので……ダメでしたか？」

まあ前日に言っというて欲しかったですけど……

「少し待っててください……着替えますから。」

「ハイ」

着替え終わりアスナを迎えに女子寮に向かう

「おはよー刹那さんにアルト!!」

「「おはようございます」」

それから雑談しながら世界樹広場に向かった。

世界樹広場にはなんか髭をつけたクーフェとヘトヘトに疲れているまき絵とネギ先生がいた。

そしてなぜか後ろには木で作られたような外見のロボットがいた。

「何アホなことやってんのよ？」

「お、アルトに刹那にアスナ 配達終わったアルか？」

今までやっていた練習内容を聞くと

空中に逆さで吊るされた状態でクーフエから飛ばされる木切れをすべて防ぎきる特訓

木で作られたような外見のロボットが攻撃してくる道を潜り抜けて行く特訓

そしてこのあとまだ鉄下駄10キロマラソンとかワンインチパンチとかいろいろ考えてたそうです。

説明を聞いてアスナが

「そーゆー練習って毎日やらないとダメなんじゃない？」

「ム、やはりそうか！昔のマンガや映画を参考に地獄の特訓メニューを考えたのは失敗だったかナ。」

「くー老師！？」

「クーフエのバカーツ！！」

「もっと参考になるものがあるでしょうに……」

「まあまあアルト……クーフエさんですし」

それから私達三人は剣術の練習をしたりして学校に行きました。

放課後

また世界樹広場に集まった私達

「ニヤハハハ朝はスマンかたアル。ここからはマジメにやるネ」
すまなそうに謝るクーフエ

「もーしっかりしてよクーフエ」

「そう言えばこのか。」

「なに？アルト君」

「どうしているんですか？」

「せっちゃんとアルト君が気になったからやな。」

「……………そうですか。」

「よしネギ坊主茶々丸に勝つ方法を考えるね。こっち来るアル。」

「ハイ」

ネギ先生たちは特訓に入る

「じゃあ刹那さん、アルト朝の続きやろうか。」

「ええ」

「じゃあアスナと刹那で軽く打ち合ってください。」

軽く打ち合い始める二人

まだ練習始めたばかりですがアスナはちゃんと上達していますね

するとそこにまき絵が

「アスナも刹那さんとアルト君に剣道習ってるの？」

「え、うん。朝も配達の後にとね。」

「ネギ君もだけど……何でイキナリ？」

「えーとその、修学旅行でいろいろあって……私の場合は何か成り行きて感じだから別にやんなくてもいいんだけど……刹那さんやアルトとこうして練習してるのも楽しいしね。」

嬉しいことを言ってくれますね。

「まあでもネギ先生の場合はちゃんと目的がありますよ。」

「え？なにに？アルト君、ネギ君やっぱり何かあるの？」

「それは……言っただけいいのかわかりませんので……それに私は詳しく聞いた訳ではないので……」

「えー何よケチー！教えてよー」

「本人に直接聞いてみてはどうです？」

刹那…… ナイス助け船

それからネギ先生のほうに向かったまき絵

すると何か思ったのか急に立ち止まり

「頑張ろーね！！ネギ君！！」

イキナリそう言い切った。

「よし明日は土曜で休みだしぶっ続けて練習頑張るよーっ」

「オーツ！！」

「コラコラあんた達睡眠はちゃんと取りなさいよ」

「さて、私達も続きしましょうか？」

「そうですね。」

そうしてネギ先生に付き合って翌日

土曜日 午後4時

ネギ先生が弟子入りテストまで残り八時間

「よし！そこまでアルネギ坊主。」

クーフェがネギ先生の動きを止め

「これで時間内に教えられるコトは全て教えたアル！後は運を天に任せ残りの八時間は休息と復習に使うヨロシ！！」

「ハイッ！クー老師。」

すると

「おーい」

裕奈とアキラと亜子がなにかを持ってきたきた。

「ネギ君今夜何か試合するんだって!？」

「差し入れに豪華特製夕御飯弁当作ってきたわー」

それから全員でお弁当を食べ始める

「ほんでその試合には勝てそうなん？」

「裕奈口にウィンナーくわえながら喋らないでくださいよ。」

「いーじゃん。かたいなあアルトは。」

「それがこのネギ坊主、反則気味に飲み込みがいいアルよ。フツッならサマになるのに一月とかかる技を三時間で覚えるアル。全くどーなっとるかネこのガキは……世の中不公平アル」

「へえ〜っ!」

「でもそれ位じゃないと10歳で先生なんてできないかも……」

まあアキラが言うことも一理ありますね

「そっかー!さっすが天才少年!じゃ、楽勝だね!」

「いえ、あの、そんなことは……」

ネギ先生が否定しようとしては

「ん?」

何か匂いますね……ネギ先生からですか?

アスナも気づいたようです

「ちょっとネギあんなにかくさくない?」

「え？」

「あんたまさか……またお風呂入ってないとか？何日入ってないの？」

「いやっ……」

本当ですかネギ先生……

「お風呂ぐらい入りましようよ」

「あんたは」

「いえっあの！これはちよつと忘れてて……」

「言い訳しないっホラ来なさい！！洗ってあげるから」

ズルズルネギ先生を引きずるアスナ

シャワーを浴びに行くんでしょうか？

ならついて行くわけには行きませんね

「アルトも行くわよー」

「あ、アスナ！？何言ってるんですか？」

「何ってあんたも汗かいてるでしょ？」

「……せ、刹那！？」

助けを求め刹那をみますが……

「これ、美味しいですね。」

「でしょー実は味付けに秘密があるんよ」

亜子と料理の話をしている

その間にもどんどん引っ張られていく。

「アスナー私男なんですが……」

そう言ってようやく気づいたのか

「あ、そう言えばそうだったわね。余りにも自然に誘っちゃったわ。アハハ」

笑って誤魔化そうとしてませんか？

まあ良いですが

「汗をかいているのは事実ですから……………一旦帰りますね。それではネギ先生また夜に……………」

「ええまた後で」

そうして一旦別れた

弟子いりまで その3（前書き）

弟子いり編 最終話

長かった……

アンケートのほうもよろしくお願いします。

弟子いりまで その3

日曜日 午前0時ちょっと前
世界樹広場

いま私はエヴァと茶々丸と茶々零の四人でネギ先生が来るのを待っています

すると壁にもたれかかっている茶々零が

「オイ御主人コレジャ試合が見エネーゾ。モットイイ位置ニ座ラセロヤ」

「全く役立たずのくせに口うるさい奴だ」

「仕方ネーダロ動ケネーндаカラ。」

「なら茶々零私の頭の上で良いですが？」

「ウン？マア才前ノ頭ノ上ナラココヨリイイダロ」

そう言って頭の上ののっける。

すると今まで口を開かなかった茶々丸が

「しかし……良いのですかマスター。ネギ先生が私に一撃を与える確率は概算約3%以下……ネギ先生が合格できなければマスターとしても不本意なのでは？」

「……おい勘違いするなよ茶々丸。私はホントに弟子などいらんのだ。メンドいからな」

「素直じゃないですね」

ちよつとからかつてみる

「ホントだ！ーそれに……一撃当てれば合格などと破格の条件だ。これでダメならばーやが悪い……いいな茶々丸手を抜いたりするなよ。」

「ハ……了解しました」

「そろそろ時間か……」

エヴァが時計で時間を確認すると

「……どうやら来たようですよ」

ネギ先生達がちょうど来た

「ネギ・スプリングフィールド弟子入りテストを受けに来ました！
！」

カチッ

ちょうど0時になった

「時間通りですねネギ先生」

「フフ……よく来たなばーや。では早速始めようか。お前のカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れられれば合格。手も足も出ずに貴様がくたばればそれまでだ。わかったか？」

「……その条件でいいんですね？」

何か考えがあるのかネギ先生がちよつと笑った

「ん？ああいいぞ……それよりも……そのギャラリーは何とかならなかったのか！」

昼間にいたメンバー全員ですか……

「はぁ… ついて来ちゃって…」

そしてテストに入る

応援メンバーから言葉を貰うネギ先生

私も何か言ったほうが良いのでしょうか？

まあ皆さんが言ってますし私も一言

「ネギ先生」

「なんですかアルトさん」

「一言だけアドバイスを……決して諦めないこと……実力に差があるのは自分でも分かっているでしょう。ならイメージだけでも……心の中だけでも勝ちなさい……そうすればきっと……茶々丸に届くはずですよ」

「……ハイッ!!」

そうしてテストが始まる

私はせっかく今回エヴァが許可をくれたのでみんながいる方で観戦します。

茶々零？

もちろんまだ頭の上ですよ？

「茶々丸さん。お願いします!」

「お相手させて頂きます」

「だ、大丈夫だよねアルト君」

「まき絵……微妙でしょうね。正直な話単純な確率では茶々丸曰く3%以下確率しか無いそうですし……実際茶々丸はかなり強い」

「つまり長引けば不利!最初の1分でカウンターを当てられなければネギ坊主に勝ちはないアル」

「そんな……」

「そうでもありませんよクーフェ。」

「なぜアルか？」

「ネギ先生は根性ありますから」

そして

「では始めるがいい!!」

エヴァの声によりテストは始まった。

「失礼します」

茶々丸が近づく

「契約執行90秒間ネギスプリングフィールド!!」

自身に魔力供給を開始するネギ先生

まず茶々丸の左をガードする。しかし茶々丸の右肘からブースターが出て一気に加速したパンチが来るがそれを受け流しその力をそのままいかし技に

「八極拳転身跨打!!」

しかし茶々丸にガードされる

「おお!!」

「む、惜しい!!」

それからしばらく打ち合いが始まる。

「ななな、何やコレ!!」

「ポコポコ殴りあうだけと思ってたのに何者この二人!!?」

そうか、祐奈たちは一般人でしたね

おっと茶々丸のいい蹴りが入りましたね。

「ネギ君!!」

「いや作戦どおり!!あれは誘いアル!!」

クーフエが言ったとおり罠だったのかすぐにネギ先生は構え直す。

茶々丸の右ストレートを左に流しそのまま左をつかんだまま肘うちをしようとするが

「甘いですねネギ先生」

そんな罠に茶々丸が引っ掛かるはずなのに……

茶々丸は捕まれた左手を支点に回転しその勢いのままネギ先生を蹴り飛ばす

「……チッ（この程度か……）」

「ゴキゲンナナメダナ御主人」

「茶々零こちらにいる間はあまり喋らないでくださいよ……」

まあ確かにゴキゲンが悪そうですが……

「残念だったなばーや。だが、それが貴様の器だ。顔を洗って出直してこい」

まあこの程度で諦めるハズ無いんですがね……

「へ……へへ」

やはり立ちましたか

「まだです……まだ僕くたばってませんよエヴァンジェリンさん」

「ぬっ……？何を言っている？勝負は着いたぞガキは帰って寝ろ。」

「アイツヒット直前二障壁二魔力ヲ集中サセタナ。」

「だっからっ、喋らないでください。」

「……でも条件は“僕がくたばるまで”でしたよね。それに確か時間制限もなかったと思いますけど？」

そこでようやくネギ先生の考えていることがわかったのか

「な……何っ！？まさか貴様……」

「へへ……そのとおり一撃当てるまで何時間でも粘らせてもらいます。……茶々丸さん続きをー！」

「し、しかし先生……」

「やああああー！！」

ネギ先生が近づこうとするが契約執行が切れたせいかスピードがない

「茶々丸さん……ほ、本気どお願いします。手加減されて合格しても意味ないですから」

膝をつきながら茶々丸に言う

「で……でも」

「茶々丸、本気でも良いと思いますよ。」

「しかしアルトさん……」

「ネギ先生が本気でと言ったんですから……大丈夫ですよ」

会話をしてる間にもネギ先生は攻撃した

「……わかりました」

それから一時間以上の間一方的にやられるネギ先生

「はぁ……はぁ……はぁ」

息も途切れ途切れですし顔も腫れてますね。

「お、おいぼーやもついいだろ。いくら防御に魔力を集中しても限界がある。お前のやる気はわかったからな？」

「根性アルナーアイツ。」

「でしょう茶々零」

「ただどネギ先生は」

「い、いえま、まら……あきらめないでふ……」

茶々丸に未だ挑んでいく

「センサーもーやめてーっ!!」

「もう一時間以上になる」

「ネギ君何であんなにがんばるのー？」

亜子とアキラと祐奈が心配そうにする

「……」

アスナ……涙目ですか……

「も、もう見てらんない止めてくる!!」

「オ、オウアスナ」

クーフエとアスナが止めに入ろうとするが

「ダメーツアスナ!!止めちゃダメーツ!!」

「で、でも、あいつあんなボロボロになって……あそこまで頑張ることじゃないよ!」

「わかってる、わかってるけど……ここで止めるほうがネギ君にはひどいと思う。だってネギ君どんなことでも頑張るって言ったもん!!」

「まきちゃ……でもっ……あいつのあれは子供のワガママじゃん!ただの意地っ張りだよ。止めてあげなきゃ……」

「違うよっネギ君は大人だよ!」

「ま、まきちゃんシャワーでもそう言ったけど、あいつどこからどう見たって……」

「子供の意地っ張りであそこまで出来ませんよ」

「アルト……あんたまで……」

「そりゃ見た目は子供かもしれない……だけどネギ先生の行動には信念がある……覚悟がある……だから……邪魔してはダメです。」

「アスナ自分でも友達でも先輩でもいいし男の子の知り合いでもいいけどネギ君みたいに目的持つてる子いる？あやふやな夢みたいのじゃなくてちゃんとこれだって決めて生きてる人いる？」

「そ、それは……」

ネギ先生以外のみんながまき絵に注目する。

（なんだあれは……あ、青い……これが若さか……）

「ネギ君は大人なんだよ。だって目的持つてがんばってるもん。だから……今は止めちゃダメ。」

「……まきちゃん……」

（／／／ふん、中３のガキの割には……）

「照レテヤガンナ御主人」

「まき絵さん……」

茶々丸がこちらに気を取られる。

「ネギ先生今です!!」

「あ……オイ茶々丸!!」

エヴァと声が被るが

「えっ」

ぺちんっ

ひよろつしたパンチが一発茶々丸に入った

「……あ」

「な!？」

「今……当たりまふいたよね……」

「ええネギ先生。私がしっかり見てましたよ。」

「え……へへ……」

ドサッ……

ネギ先生が倒れる

「「「ヤッターッ!!」「」」

「ネギくん」

まき絵たちがネギ先生に近づく

「コラー茶々丸ーッ!!」

「す、すすすいませんマスター!!」

チュンチュン

うわぁ、鳥が鳴き始めましたよ……

夜が明けますね

しばらくして

「う……あ……あれ?ぼ……僕?テストは……?」

ネギ先生が目を覚ます

「大丈夫よネギ。」

「合格だよネギ君」

「……ふん負けたよばーや。約束どおり稽古はつけてやる。いつでも小屋に来な。」

「……ああそれとな、そのカンフーの修行は続けておけ。どのみち体術は必要だしな。理屈っぽいお前に中国拳法はお似合いだよ。じやあな……ああそれとアルト。早めに帰ってこいよ。」

「ハイハイ。」

「あ、ありがとうございます。エヴァンジェリンさん……」

「ネギ坊主よくやったアル!!」

「スゲーよネギ君」

「見直したわー」

「ネギ君ウチごほうびに美味しいごはん作ってたげるからなーッ!!」

「よく頑張りましたねネギ先生」

「……アルトさん……あなたの言葉があったからですよ……」

「いえ、ネギ先生あなた自身が頑張ったからですよ……それと……さん付けはいりませんよ。」

「わかりました。……アルト……」

「ハイ、良く出来ました。」

それからネギを部屋まで運んでいった。

このあとにまき絵は新体操の選抜テストがあるらしいが

まあ今のまき絵なら受かるでしょう。

とりあえず部屋に運んだら治療ですかね

スキット集 修学旅行〜弟子いりまで（前書き）

15万PV突破あああ！！

皆さんのおかげです。

ありがとうございます。

これからも頑張っていくんでよろしくお願いします。

ではスキット集です。

テイルズシリーズにあるような会話が中心の話です。

スキット集 修学旅行／弟子いりまで

食事中

アルト「モグモグ」

朝倉、クーフエ、まき絵「「じ」」「」

アルト「モグモグモグモグ」

まき絵「ねえ朝倉なんでアルト君ってあんなに食べても太らないの？」

クーフエ「うわあ、またおかわりしたアルね。」

朝倉「今のでおひつが三つめだよ。」

クーフエ「あの小さい体によくあんなに入るアル。」

三人「「」」どうしてだろう?」「」

アルト「モグモグ」

ホテルでの朝食風景でした

路上にて

男A「ハイ彼女お茶しない？」

アルト「……ずいぶん古典的なナンパですね。」

男A「うーん、冷たいねえ。で、どう？」

アルト「友人を待たせてるんで「甘いもの奢るよ」……待ち合わせがあるんで」

エヴァ「いま、揺れたよなアルトのやつ」

茶々丸「揺れましたねマスター」

ナンパされていた所を目撃したエヴァと茶々丸でした

学校で…

ネギ「ではこの問題を……」

アスナ「ヒョイ（目そらし）」

ネギ「うーん」

まき絵「ヒョイ（目そらし）」

ネギ「……えつと……アルトさん」

アルト「無理ですネギ先生」

ネギ「チャレンジしましょうよ!」

アルト「日本語も上手く話せるかどうかなのに英語なんか論外です。」

このか「なあなあせつちゃん」

刹那「なにこのちゃん？」

このか「アルト君って見た目外人やよね？」

刹那「そうですね」

このか「なのに英語が苦手って不思議やなあ。」

ネギの授業の一風景

女子寮にて

アルト「刹那く暇です。」

刹那「アルト……人のベッドで寛ぐの止めてくれませんか？」

アルト「嫌ですく刹那の匂いが好きなんで」

刹那「／／／……」

アルト「うりゃ」

刹那「／＼／＼うわぁ！ちょっとアルト！？人をベッドに引きずりこまないでくださいよ！！」

アルト「いいからいいから、はぁ～落ち着きますね。」

刹那「……私はあなたのだき枕ですか……」

アルト「まあ良いじゃないですか……昼寝しましょうよ」

刹那「……仕方ないですね」

真名が帰ってくるまでその状態で寝ていた二人なのでした。

体育にて

アルト「エヴァいきますよ。」

エヴァ「よし、来い!!」

アルト「それ」

カキーン

ドコッ!!

エヴァ「お、おいおい」

アルト「ありゃ？」

ネギ「う、うーん」

アルト「大丈夫ですかネギ先生」

ネギ「だ、大丈夫ですよ……なんとか」

エヴァ「アルト!!おもいつきり打ちすぎだ!!」

アルト「だって来たボールはおもいきり打って教科書に……」

刹那「ノックの練習であそこまで強く打つのは……」

アルト「……すみません」

体育の時間にソフトボールのノックをやっていてネギに当たったやつたよ事件

料理の腕前 その1

アルト「所で刹那の料理の腕前ってどうなんですか？」

刹那「エッ!？」

アルト「……あー、良いです……今ので大体分かりました。」

刹那「ちょ、ちよつとアルト!!」

アルト「大丈夫ですよ刹那。この世には料理が下手な人なんていくらでもいますから……」

刹那「……………うえゝんこのちゃん」

アルト「刹那!?!……………走って行っちゃいましたか……………」

刹那「このちゃん!!」

このか「どうしたんせつちゃん?」

刹那「ウチに料理教えて!!」

このか「べ、別にいいけど……………」

刹那（よし、見ててくださいよアルト!その認識改めてさせてあ

げます。
)

刹那の料理の腕前……続く

休みましょう。(前書き)

今回はちょっと短いです。

アンケートのほうもよろしくお願いします。

休みましょう。

弟子いりテストの後私達はネギ先生達の部屋にいた

「ハイ、ネギ君動かんてなー」

消毒しながら治療をするこのか

「あたたた！」

その様子を下でアスナ、刹那と私は京都で買ってきたおたべを食べながら見ていた。

「こんなになるまでがんばってー。もーネギ君意外と熱血なんやなー」

「す、すいません。」

「でもさーこのか。修学旅行の時みたくあんたの能力でパーツと治してあげたり出来ないの？」

「んーでもあの時ウチエヴァちゃんに言われたとおりやっただけやし、それにウチまほーなんてどう使ってえーかわからん。」

「そりゃそーか」

「僕も回復系はあんまり……」

「今度教わりに行ってもいいかも知れないですねエヴァンジェリンさんに。アルトはそういうの出来ないんですか？」

「刹那……そりゃ出来たらやってますよ……確かに自分を回復させる物は持ってますがネギを回復するのは無理ですね」
アヴァロン

もうちょっと大怪我だったら貸しますけどね

「いやーしかしお疲れだぜ兄貴。」

「うん。これで色々エヴァンジェリンさんに教えてもらえるしクーフェさんも修行続けてくれるって言うてたし、後はがんばるだけだよ。」

「しかし大変なのはこれからだぜ兄貴。」

「……そうですね。特に格闘技術等は頭で理解するだけでなく長い時間をかけて正しい形と用法を体に覚え込ませていかなければ昨日

の茶々丸さんのような人には勝てません。それでも昨日の先生はスゴかったですが……修行がんばってくださいね。先生」

「ハイ刹那さん」

「まあ、昨日のあれは茶々丸が見せた隙をついたもんですし……今のままじゃ私にも一撃を食らわせることは無理でしょう。精進してくださいねネギ。」

ちよつと釘を刺しておく。調子に乗るとは思いませんがね

「うつ…ハイ、アルト（やっぱりアルトは強いんですね……実際に戦ってる所は一回しか見たこと無いですし……よし！！がんばるぞー！！）」

ネギが何かの決心を固めたようなところをアスナが

「そうだ。ネギあの手がかりの地図はどうなったのよ？」

「あ、それなんですけど」

何ですか地図って？

聞こうとした時に

ピンポン

インターホンがなった。

「ハイ」

このかが玄関に出ていく

「あれー茶々丸さんや。どうしたん？ネギ君？うんいるえ」

ネギが玄関に向かう

どうやら茶々丸に向かうそうですね

「そっいえばアルトってさ」

「なんですかアスナ？」

「ぶっちゃけどれぐらい強いのか？」

強さですか……

「今のネギより上の自信はあります。刹那とは……いい感じに打ち合うことは出来ますがまあ、私が勝つでしょう。」

「ウッ!」

「そ、そんな落ち込まないください刹那! あくまでも今は、一緒に修行すれば私より強くなりますよ。」

「なんか慰めてもらって……私はやっぱりだめです……」

完璧にネガティブモードですね……

どうでしょう……

「じゃ、じゃあアルトがこの学園で勝てない相手は?」

アスナが質問を変えてきた。

助かります

「勝てない相手ですか……エヴァには勝てる気しませんね。」

強さは一流の魔法使いですし……

「ふん」

なんて話をしていると茶々丸とまき絵に亜子が入ってきた。

「お邪魔しまーす!!」

「「お邪魔します」」

「どうでした選抜テストは？」

まき絵に聞いてみる

「うん！聞いて聞いてアルト君。受かったんだー選抜テスト!!」

「良かったですねまき絵」

「うん良かったよ。」

それでお祝いのお茶会を開いた。

そのお茶会の途中

アスナとネギが出ていきましたがまあそれ以外は普通のお茶会でした。

「あ、このか。」

「なに？アルト君？」

「ネギに明日図書館島に来てくださいと伝えといて貰えませんか？エヴァが早速修行をするそうですので……」

「わかったえ」

「では、お邪魔しました。」

徹夜だったので凄い眠いです。

早く帰って寝ましょう

修行とケンカ

次の日

図書館島の一角

修学旅行で魔法使いの関係者のメンバーがネギの修行のため集まった。

「よし、では始める。刹那^{「コソフリクト」}の気^{「」}は抑えておけ。相応の練習がなければ^{「」}魔力^{「」}と^{「」}気^{「」}は相反するだけだ^{「」}」

「はい、エヴァンジェリンさん（やはりそうだったか）」

「いきます」

エヴァが指示をだしネギが始める

「契約執行180秒間！」

パクティオカードに魔力を送り始める

「ネギの従者近衛このか！！宮崎のどか！！神楽坂アスナ！！桜咲

刹那」

名前を呼ばれた四人にネギの魔力が行く

四人の反応は

「うひゃひゃっこそばー」

「あう……」

「慣れないのよねコレ」

「そうですか？私はそれ程……」

全員違う反応を示しますね

「よし次だ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

次の指示を出す

それから少しして

「次！対魔・魔法障壁全力展開！！」

トマトジュースを飲みながら指示を出す。

「ハイ！」

「そのまま3分もちこたえた後北の空へ魔法の射手199本！！境界張ってあるから遠慮せずやれ！」

「うぐっ……ハ、ハイ！！！」

そろそろ辛くなってきたようです

「光の精霊199柱集い来りて敵を射て！！！」

ネギが魔法を放つが……

「せんせー？」

「ネギくん！？！」

魔力を使いすぎで気絶しましたか……

「フン、この程度で気絶とは話にもならんわ！！いくら奴譲りの強大な魔力があつたとしても使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！！」

「よーよーエヴァンジェリンさんよおそりや言い過ぎだろ？兄貴は10歳だぜ。四人同時結界3分＋魔法の矢199本なんて修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねーか。気絶して当然だぜ。並の術者だつたらこれでも十分……」

バカですかカモ、エヴァにそんなこと言っても無駄に決まってるでしょうに

「黙れこの下等生物が……並の術者程度で満足出来るか……煮て食うぞ？元々貴様不法侵入者だしな。第一、コレぐらいならアルトだつてこなせるわぁ！！」

カモが怯えてアスナに抱きつく

「私を師と呼び教えを乞う以上生半可な修業ですむと思うな。いいか、ばーや。今後私の前でどんな口応えも泣き事も許さん。少しでも弱音を吐けば貴様の生き血、最後の一滴まで飲み干してやる。心しておけよ。」

殺気を出しながら忠告するエヴァ

だがネギは

「はい！よろしく願いしますエヴァンジェリンさん！！」

「む……？」

予想外の返答にたじなんでいますね

「わ、私のことはマスター師匠と呼べ」

「はい、マスター！あのつとところで……」

何か聞きたい事でもあるんでしょうか

「ドラゴンを倒せるようになるにはどれ位修業すればいいですか？」

……ドラゴン？

「何？……もう一回言ってみろ」

エヴァも同じ事を思ったのかもう一度聞いた

「ですからドラゴンを……」

「ほうほうドラゴンか……」

「はい！」

「アホかーッ！！」

エヴァのグーパンが入る

「ぺぷあー！？」

「21世紀の日本でドラゴンなんかと戦うことがあるかーッ！？アホなこと言ってる暇があれば呪文の一つでも覚えておけー！」

「あつうー！！じゃ、じゃあ参考までに……」

諦め悪いですねネギ……どこかでドラゴンに会いましたか？

「まあドラゴンを倒せるぐらいの強さなら……アルト並みになっておけば大丈夫だ。」

「適當なことを言わないでくれませんかエヴァ?」

「だが事実だ」

それから少し時間がたち

「まあいい今日はここまでだ解散!」

「ハイマスター!」

そうして今日の修業は終わったのだが

アスナの様子が変わったので

「アスナ……どうしましたか？」

「どうかしましたかアスナさん？」

ネギと同時に声をかけた。

「……別にー……聞いたわよネギ、あんた私に内緒で今日の明け方図書館島へ行ったでしょ」

あれ？ なにかアスナ怒ってますか……

「えっ！？ えーと、あの、それは……」

「……何で私を連れていかなかったのよ。」

「……私も聞いて無いですね……それは」

話してくれればいいのに

「いえ、それはどんな危険があるかわかんなかったし……」

「それも聞いた！ ドラゴンだか知らないけどなんかスゴイのがいたんでしょ？」

「さっきの話しに出てきたドラゴンもそれですか……」

「危ないじゃない！！何で私に言わなかったのよこのガキ！！」

「ガ、ガキつてアスナさん　アスナさんは元々僕たちとは関係無いんですから、いつまでも迷惑かけちゃいけないってちゃんと考えて僕」

ネギ……あなたはバカですか？

「かつ……関係ないって今さら何よその言い方！！ネギ坊主ーッ！？」

本格的に怒りだしましたねアスナ……まあ悪いのはネギですが……

「アスナさん？いえ僕は無関係な一般人のアスナさんに危険がないようにって……」

「無関係って！こつこの……私が時間がない中わざわざ刹那さんとアルトに剣道習ってるの何でだと思ってるのよーッ！？」

「そんな！？僕別に頼んでないですそんなの……何でいきなり怒っ

てるんですかアスナさん!？」

「何でってこれだからガキは……あんたが私のことそんなふうに思ってたなんて知らなかったわガキ!!チビ!!」

「アスナさんこそ大人気ないですーッ!!年上のくせにつ怒りんぼ!おサル!!」

「……あなたたち二人仲いいですね」

子供のじゃれあいみたいに見えてきた

「な、何ですってえ毛も生えてないガキのくせに生意気言っくんじゃないわよ!!」

聞こえてませんね……

「アスナさんだってクマパンでパインのくせにっ!!僕聞きましてたよパインって毛が生えてないってことですーッ」

ネギ……それは女子に対して言うてはいけないでしょう……

案の定その言葉をきっかけにアスナがハマノツルギでネギを殴ってどっか行った

「ア……アスナさ……」

「今のはネギ、あなたが悪い」

そんな事しているとエヴァが

「……まったく何バカやってんだガキどもが……ぼーやと近衛このか、お前たちには話がある。帰りはウチに寄っていけ」

そうしてとりあえず一時帰宅することになった。

エヴァ邸にて（前書き）

アンケート終了しました。

いろいろな意見が集まり助かりました。

発表をお楽しみに……

さて今回はアルトがとんでもないことを暴露する？

エヴァ邸にて

あれからエヴァの家の向かい二階の部屋にエヴァ、茶々丸、茶々零、ネギ、このか、刹那、私の七人が集まっています

そしてエヴァがこのかとネギに魔法に関する授業をしています。

「お前達二人の魔力容量は強大だ。これはトレーニングなどで強化しにくい言わば天賦の才、ラッキーだったと思え。」

エヴァが眼鏡をかけながら黒板を使い説明する

「但し、それだけではただデカイだけの魔力タンクだ。使いこなすためにはそれを扱うための“精神力の強化”あるいは“術の効率化”が必要になってくる。どちらも修業だな。」

刹那と私は椅子に座り真面目に聞いている

「ちなみに“魔力”を扱うためには主に精神力を必要とし“気”を扱うのは体力勝負みたいな所があるんだが」

バンッ

机を急に叩き

「人の話を聞け貴様らーッ!!」

「聞いてますよエヴァ。」

全く失礼な

「アルトと刹那はいい……話をしている本人達だ!!」

ネギとこのかは

「あううーアスナさんとケンカしちゃった……どうしよう」

「まーまーネギ君」

泣いて落ち込んでいるネギをこのかが慰めている。

「うじうじしてるとくびるぞガキが」

「エヴァ……言い過ぎです」

「うう、でもアスナさんが……」

「ネギ、あなたも落ち込み過ぎです」

エヴァが眼鏡をはずしながら

「フン……貴様等の仲違いは私にはいい気味だよ。クククッお前とアスナのコンビには辛酸を舐めさせなれてるからな。もっとやれ」

「刹那、どうやってエヴァを止められますか？」

「知りません。」

「あつ」

それからエヴァはこのかに目を向け

「このかお前には詠春からの伝言がある。」

「父様が？」

ネギを慰めていたこのかが顔をあげる

「真実を知った以上本人が望むなら、魔法についても色々教えてやって欲しいとのことだ。（あーめんどくさ）」

心の中でめんどくさいとか思ってますよね。

「確かにお前のその力があれば偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）を目指すことも可能だろう。」

「マギ……それってネギ君の目指しとる……？」

「ああ、お前のその力は世のため役に立つかも知れんな。考えておくといい」

「うーん」

「お嬢様……」

悩み始めるこのか

「まあまだ考えておくだけでいいんですよ。答えを今急いで出す意味は無いですから」

「次はぼーやだ。」

そしてエヴァはまたネギに視線を向け

「これからの修業の方向性を決めるため、お前には自分の戦いのスタイルを選択してもらう。」

「戦いのスタイル……ですか」

「うむ。修学旅行での戦いからお前の進むべき道は二つ考えられる。二者択一、簡単に言おう」

そこで一旦言葉をきり

「まずは“魔法使い”前衛をほぼ完全に従者に任せ自らは後方で強力な術を放つ。まあ私の前回の戦いのスタイルだ。メリットは安定していること……」

「デメリットは？」

「前衛がいなくなれば身を守るものが無くなり負ける……」

まあ確かにぶっちゃけ砲台ですからね……

「そして“魔法剣士” 魔力を付与した肉体で自らも前に出て従者と共に戦い“速さ” を重視した術も使う。まあ身近なアルトがいい例だな。相手に対して変幻自在のスタイルだ。メリットは一人でも戦えること。デメリットは自身の魔力がきれたらジ・エンド。」

「“魔法使い” と “魔法剣士” ……」

「ゲームみたいだな」

カモが言う

「修業のためのとりあえずの分類だ。どちらもさつき挙げたとおり長所短所はある。子利口なお前は“魔法使い” タイプだと思うがな。」

ネギが考えこんでますね

「私はどっちなんでしょう?。」

「……刹那、あなた剣士でしょ。」

そんなことを言っているとネギは

「ひとつ良いですか?。」

「何だ」

「サウザントマスターのスタイルは?」

エヴァはこの質問を予想していたのか

「フツ……言うと思ったよ。……私やあの白髪の少年の戦いを見ればわかるように強くなってくればこの分け方はあまり関係無くなってくる。が、あえて言うなら 奴のスタイルは“魔法剣士”それも従者を必要としない程強力な、だ。」

ネギが笑顔になる

「やっぱりって顔だな。」

「えっいえ……」

「ま、ゆっくり考えるがいい。このかお前にはもう少し詳しい話がある。下に来い」

「あ、うん了解やエヴァちゃん」

そうして二人は下に降りて行った

二階に残った私達はネギの拳法の練習を見ていた。

「熱心ですね。」

「おもしれー動きだよな。」

「先日より上達してますね。」

そんな会話をしているとネギが拳法の練習を一時休憩して

「ふう……でも拳法じゃドラゴンには敵わないだろうしなー」魔法使い」と魔法剣士”かあ……アスナさん”どっちがいいと思います

「？」

こっちを向いて居ないアスナを探すネギ

シュールですね

やがて居ないのに気づいたのか

「……あ、ああっそうだアスナさん怒らせちゃってたんだったーッ
！ー！」

「立ち直りがはえーと思ってたら」

「忘れてただけみたいですネ。」

「……ネギ、なんて頭をしているんでしょう。」

すると茶々丸がお茶を持って茶々零と葉加瀬と共に上がってきた。

「あああーどうしようどうしようー！！！」

「とうしたんですかーアレ？」

葉加瀬がネギを指差す

「ネギ先生とアスナさんがケンカを……」

刹那がネギに声をかける

「アスナさんは何で怒ったんです？」

「ううう、それがわかんなくて」

ネギが泣きながら説明する

「アホナガキダナ謝ッチマエバイダロ。モシクハヤツチマエ。」

茶々零がネギに無茶苦茶なアドバイスをする。

「で、でも僕は何も悪いことした覚えはないのに……」
すると葉加瀬が

「そういう時は分析するのが一番ですよ先生。茶々丸そのケンカの音声データ残ってる？」

「ハイ」

そこでようやく葉加瀬がいることに気づいたのか

「あの何で葉加瀬さんがここに」

「葉加瀬は協力者ですから大丈夫ですよネギ。」

会話をしている間に葉加瀬は茶々丸からデータを吸いだし

「プリントアウト終了」さあ皆さんどうですか？」

「うん」

私、刹那、茶々丸、茶々零、葉加瀬が集まって考える

（一番女心とかわかってなさそーな辺りが集まったな）

なんでしょう？カモが今何か失礼なことを言ったような気がします。

「仲間ハズレにされたのを怒ってるように見えますが…」

茶々丸がいうと葉加瀬が

「でもでも危険な目にあわせたくないって気持ちは伝えてますよ。」

「うつ」

刹那は

「“おサル”というのはひどいのでは？」

「それ位でアスナが怒りますかね？」

「あう……」

茶々零が

「ヤッパリコノ単語ガマスインジャーネーカ？」

「……まあ相手の身体的特徴をあげつらうのはよくねーな」

カモが相づちをうつ

「えうつでもそれ元々の原因と違うんじゃない？」

「確かに私も言われたら落ち込むかも……」

「私の場合もこれが当てはまりますからね……傷付くのは分かりません。」

「「「「えっ！？」「」「」」

「アルト……今凄いことをカミングアウトしませんでしたか？」

「そうですか刹那？まあ確かに男子ではすごく珍しいらしいですが……」

「まあそれは置いてとりあえず原因はコレで決まりかな」

カモがまとめ

「……原因はパイ　ンダゼ／かもな／かもです／かと思われま
す／だと思っいますよネギ」……」

口を揃えて言う私達に

「そこから離れてくださいーっ！ーっ……どうしよう結局わかん
ない。」

さらに落ち込むネギ

「アスナさんぼくのコト嫌いになっちゃったのかな」

「そんな……」

「マ、アレダナトリアエズ謝ッチマエヨ。メンドクセーカラヨ謝ッ
タモン勝ちダゼ。ソレカヤツチマエ。」

「確かにまずは直接会って謝るのがいいと思います。アスナさんならちゃんと聞いてくれますよ。」

「原因がわからなければ本人に訪ねるのが一番の解決策です」

「だからと言ってやるのは駄目ですけどね……」

「う……そ……そうですね。まずは僕から謝らなきゃダメですね。よしそうと決まれば」

ネギが携帯をだし電話するが

「あれ？通じないな」

「兄貴カードだ」

「あ、そっか！えーと……あ、そ、外行ってきまーす。」

ネギが外に行く

「上手く仲直り出来ると良いですね。アルト」

「きっと上手く行きますよ」

それから数分後

外からアスナの叫び声が聞こえた。

どうやら仲直りは失敗に終わっただらしい。

エヴァ邸にて（後書き）

感想、誤字脱字があれば教えてください

そうですね、海に行きましょう（前書き）

時間が無かったので凄く短いです

南の島編は多分次回で終わります。

もうすぐようやく小太郎が出せるぜ！

そうですね、海に行きましよう

あれから3日後……

明日は休みですね……………何処かに遊びに行きたいですね

「そんなアルト君に朗報や」

「何ですかこのか？」

「あのなあ、いいんちよがなクラスのメンバー連れて南の島に連れて行ってくれるらしいんよ。」

「ホントですか？ 気前良いですね。」

「じゃ、一緒に行こ！」

と、言うわけで

「「「海だーッ!」「」」」

クラスの半数以上のメンバーで南の島に来ました。

「うぐぐぐ、これは一体……ネギ先生との二人っきりのパラダイス計画が……なな、なぜこんなことに。しかもクラスの半数以上が……!?!」

いいんちよどうしたんですかね？

何か悔しがってますね。

まあ私も楽しまして貰いましょうかね。

「なんで私までこんなとこ来なきゃいけないのよ」

「イヤだったんですかアスナ？」

「まあまあ、ちょーど新聞配達もお休みやったしえーやん。」

宥めた後私と刹那に小声で

「海で遊べば楽しくなってネギ君とのケンカも忘れるかも知れんし」

「……だといいんですが。」

「そう上手く行きますかね……あのネギが……」

それから思い思いに自由行動にした。

「アルトは泳がないんですか？」

「……水着を持ってきていないんで……」

「いいinchよさんに頼んでみたらどうですか？」

刹那がしつこく言ってくる

「第一海は後が大変なんであまり好きじゃないんですよ……まあ

この格好も一応濡れても大丈夫な格好ですから……」

今の私の格好ですか？

太もも辺りまでの短い水色のパンツと上に赤いパーカーを羽織つて
ます。

「まあ今日は海に入らなくても楽しめるものをやりましょう刹那。」

「ハイ。」

それからしばらくして

アスナ、このか、刹那に私の四人で砂浜を歩いていた

「アスナーネギ君もう許してあげたら？」

このかがそう言つとすぐさま

「わ、私の勝手でしょー!!」

反応してくる。

「まあ確かにネギも悪いですが……まだ子供なんですから……」

「子供でも言つていいことと悪いことが有るでしょー!」

そんな会話をしていたら前からいいんちよが……

「た、大変ですわネギ先生が深みで足をとられて……ホントに溺れてっっ!」

一瞬にして青い顔になるアスナ

次の瞬間にはもう

「どっちよー!!」

走り出していた

「アスナー待つてくださいよー!!」

こっちの言葉も聞かずに走って行った。

そして現場につくと

「こちらですわ!!」

「ネギ!!」

「うわぁぁん」

海の真ん中でサメ二匹に襲われそうになっているネギがいた

「誰か助けてーっ!!」

「ネギっ!!くっ」

躊躇なく海に飛び込むアスナ

全く……自分のことも考えなさいよアスナ。

「行きますよ刹那!!」

「ハイ!!」

私達も続けて飛び込もうとした瞬間後ろから朝倉に捕まれた

「落ち着きなつて。正義感の強いアスナにネギ君助けさせて仲直りさせよって作戦だつてさ ネギ君にも知らせてないけど」

「「さ……作戦？」」

刹那と口を揃える

「ではあのサメは？」

「いえ、ただ溺れてるだけだと緊迫感が足りないかと思って付け足しを……」

ゲッ…………千鶴…

「何か言ったかしらアルト君？」

「何でもありません。」

そんなことを言っている間にアスナがハマノツルギで海を割った

……そんな効果ありましたっけ？

海が割れた衝撃でサメが海岸に上がってきた。

あれ？中身誰ですかね？

近付いて確認すると

夏美とクーフエでした。

「何をやってるんですか……」

「バイトアルよ。」

「どうせ食券50枚とか言われたんでしょう。」

「よくわかるアルね」

そうしてアスナたちのほうに目をやると

アスナが泣いていた

仲直り？

あれから時間がたち今私は刹那とこのかの三人で釣りをしています。

「……釣れませんね。」

「……釣れんなあ。」

「……そうですね」

二時間三人で釣りをして成果は二匹だけ

「そつえばこのか。」

「ん？なにアルト君？」

「魔法使いに……なるんですか？」

今までの生活がガラリと変わりますからね。

相応の覚悟がなければ。

「うん。ウチ考えたんよ。このまませつちゃん一人にウチが守られてて良いんかって。」

「…………お嬢様」

「だからせめてウチもせつちゃんをサポート出来るくらいにはなりたいんよ。」

へえ、ちゃんと考えてるじゃないですか。

「だから…………ウチ、魔法使いになる。」

真っ直ぐな目ですね

「なら、良いんじゃないですか。ネギやエヴァがきつと教えてくれますよ。」

「そうやる。で、魔法使いになるんやったらパートナーがいるや

ん。
」

「まあ、いた方が良いでしょうね。」

そう答えるところがか満面の笑みで

「なら、せつちゃん。キスしようや。」

「お、お嬢様！？いきなり何を……」

慌てたせいか釣竿を海に落とす刹那

「せつちゃん……ウチのパートナーになってくれへんか？」

「それはいいんですが……キス以外で」

「良いじゃないですか別にキスしたって。女の子同士なんですし……」
……」

「アルト……いや、節度を守りませんと……」

「ならネギ君にパクテオーにキス以外のやり方あるか聞きに行かへん？ほら」

そうしてこのかが私と刹那の手を持ってネギの所へ連れていった。

ネギの所へ着くとのどか、朝倉、夕映がいた

「ネギ君、質問なんやけど。パクテオーでキス以外にやり方ないん？」

「このかさん急にどうしたんですか？」

「うん、ウチなあれから考えてやっぱり魔法使いになる勉強することにしたんよ。」

「えーっ！そうなんですか！ー！」

「うん それでウチせっちゃんにパートナーになって欲しいんやけど、せっちゃんが女の子同士キスするのはアカンゆーんよ」

「／／／いえっその……」

「ウチは別にえーんやけど……」

「刹那は頭が固すぎます。」

「ならアルトはネギ先生にキス出来るんですか!？」

急に話を変えてきましたね

「まあ、仮契約のためならそれぐらい……第一ネギは子供ですからね。」

「なっ……」

何か絶句してますね。

すると朝倉が

「良いじゃんキスくらい。みんなふざけてキスくらいするぜ?」

「い、いえやはり節度は守らないとっ……………」

そんなこんなでガヤガヤやっているとかモが

「ふゝむしかし、いきなり仲間が揃って来やがったな。こいつあな
かなか戦略の立て甲斐があるぜ」

「何を言ってるんですかカモ?」

「いやアルトの旦那。今後の戦略を少し…………二人が魔法を勉強して
今後使いモンになったとすると…………兄貴はまだ魔法使いか魔法剣士
か確定してないから保留にしてのどかの嬢ちゃんは読心術で補助だ
から後衛。夕映っちはまだ未定と…………このかは回復魔法などで後衛
か……………」

「後衛はなかなかですね」

「ちよっとカモ君勝手に……………」

「で前衛は刹那にアルトの旦那で……」

「私も入ってるんですか？」

「朝倉の姉さんは諜報遊撃手として……うーん前衛が二人か……」

「ちょっと足りなさ過ぎませんか？」

「やっぱりそうっすか？なら古老師にいつちょ頼むにしてもやっぱり……」

「うーんやっぱりアスナが入りますね……」

「ああアスナの姉さんがいねーと格好つかねーな。絵的にも戦略的にも……」

「ハッそうだアスナさん！！」

まだ仲直りしていなかったんですか？

「僕アスナさんに謝りにいかなきゃーっ！！」

「いつてらっしゃいネギ。頑張ってくださいねー」

「分かりましたアルトさん！！」

そうして走っていった。

さて部屋に戻りましょうかね……部屋割りみないと……

「あ、アルトは私とお嬢様と一緒にですよ。」

「そうですか……っておかしいでしょ！！」

「何処がですか？」

「別にウチもアルト君なら一緒に良いでー！」

なんかテコでも動かなそうですねこの二人……

部屋に着くと……

「ベッドが二つしか無いんですけど……」

「確かに……」

「ああ、ならウチ別の部屋に行くわあ。」

そう言っ出ていこうとするのか

「あ、待ってください。出るなら私がネギの部屋に行きますよ。」

そう言っ荷物を持って移動しようとしては

「アルト君……ならベッドをくつつけて三人で寝ればいいんよ!!」

このかがとんでもないことを提案してきた。

「「な、何を言ってるんですかこのか／お嬢様!?」」

「えー三人で寝ようや／それなら全て解決やん。」

そう言っつて反論を許してくれなかった。

そうして三人で川の字に並んだ

順番は、私、刹那、このかで並び寝ました。

朝になるとこのかと私は刹那に抱きついて居たのはお約束ですな…
…

仲直り？（後書き）

明日は更新出来るか分かりませんが頑張りたいと思います

EX: story 夢? (前書き)

書きたくなりました。

セイバーって確かにライオン好きだったなあって思った時にあのゲームの攻略本が目の前にあったので書いてしまった……

まあ何かの伏線になると思います……

ちなみにこの話に出てきた二人は多分もう出ないと思います……多分……

EX: story 夢？

これは夢？

気が付くと一人で女の子を背に背負い端の見えない橋を歩いている

……

……これは私じゃない？

体が勝手に動いている

何故？

すると頭に男の声が響く

（リノアの声が聞きたい……）

それに倣うように女性の声が

（なあに？ スコール）

スコールって誰ですか？

するとまた声が頭に響く

（何時もは俺が望まなくっても、リノアは話しかけてきた。）

（おハロー！ スコール。今日は何をやるの？）

（目があえば微笑んだ。）

（エヘヘ／＼／＼私不器用何だよね。）

（だから俺はそれが当たり前になっていた。）

（今日も元気に行ってみよう！）

（でも）

（あのね、スコール）

（もうリノアは笑わない）

（寂しいなあ）

（おれに話しかけて来ることもない。）

なんなんですかこれは！！

聞きたくない！！

（だめだったの、一人じゃだめだったの）

（人形のように

冷たくて……………

動かない……………）

（ただ生きているだけ）

ここから私を出して！！

（リノアがその状態になってようやく俺は気づいたんだ。）

（なんか、うれしいぞ）

この男は後悔してるんだ…

（リノアの声が、）

（今のうれしい！ウソでもうれしい！）

（動きが、）

（えい！パンチ）

（微笑みが、）

（ような気がしましたあ？）

（俺にとってどれほど大切だったか………）

大事な者を無くして…心の中で泣いてる

（ガルバディアガーデンに攻め込んだあの日）

頭の中に戦いの風景がよぎる

（ママ先生 魔女イデアを撃ち破り、そして）

すると一層心の中が暗くなる

私とこの人は今精神が繋がっている？

（リノアは倒れた）

感情が流れてくる。

（何が起こったのか、）

（ねえ、楽しい？）

（誰にもわからなかった。）

（いつでも冷静な判断で仲間の希望を否定して楽しい？）

この人は孤独だったの？

（正気を取り戻したママ先生にさえ。）

（リノアの身体だけが、）

（時を止めたように横たわっていた。）

それ以上考えないでください！！

（すべては、終わってしまったのだろうか。）

なら何故貴方は前に進むのですか！？

（良く笑う、）

（エヘヘ／＼／＼スコール！行こ！）

（おせっかいで怒りっぱいリノアはもう二度と帰ってこないのか。）

（起きろ〜スコール）

（俺にはもう、）

（起きないと私が布団に入るぞ。）

（みんながリノアの事を考えるのをやめてしまったように思える。）

（“過去の人”という記憶の引き出しにしまい込まれて、）

いや、この人はまだ諦めて無いんだ。

（リノアもやがて過去形で好き勝手語られるのか？）

（自信た〜っぷりって顔だね！）

（そんなのはイヤだ。）

守りたいんですか？

（たとえ世界に俺一人だけでも、終わってないって信じたい。）

（て、てれるぜ／＼／＼）

（リノアを諦めたくない。）

（私のことが……好きになる、好きになる。
ダメ？）

（だから俺は今歩いているんだ。）

（いいよん）

この人は孤独じゃない……

（エスタへの遠い道を）

（行くぞ、スコール！）

（エルオーネなら、）

孤高の……

（あの日のリノアの運命を変えてくれるかもしれないから。）

（ちがうのちがうの！）

……獅子

（陽光に輝く海と、どこまでも続く道。）

（ゆるみましょう、ゆるみましょう！）

（風がリノアの黒髪をなびかせて、）

（さあ、コンサートへ、いざ行かん！）

（俺の首に当たる。）

（エヘヘ／＼／＼でもさあ、同じ指輪してたらみんなに誤解されちゃうねえ）

（背中からは、）

（ははっ！ありがたきしあわせ！）

（ほのかな体温も伝わってくる。）

（こんなわたしではございますが……一緒にいれば、スコール様

も考え込まなくてすむかな、と思ったわけでございます。）

（きつと、）

（いかがでしょう、スコール様？）

（リノアは疲れて眠っているだけで、）

孤高の獅子……だけど……

（またまた、おハロー）

（俺が重いと言えば、）

この人は今……

（飛び起きて怒ってへそをまげるんじゃないか……）

“一人”じゃない

（そんな風に考えたら）

“孤高”なのに…

（視界が少しぼやけた。）

“仲間”がいる

（俺は変わったと思う）

きつとこの人はこの背中に背負ってる女性のおかげで

（リノアのおかげで。）

（やった〜！）

獅子の心を持ちながら…

（リノアが目覚めてくれたなら、俺はもっと変われると思う。）

孤高じゃなくなっただ…

（話したいことが、）

だからこそ……

（たくさんあるんだ………）

諦めたく無いんだ…

（今度こそ………）

この女性のおかげで“孤高の獅子”は……

（もっと素直に………。）

“仲間を護る強き獅子”になっただ……

（リノア………。）

（スコール………）

そうして私の視界は白く染まった。

「……い……おい……」

誰かの声が聞こえる……

「……ア……おい……」

エヴァ？

「アルト起きろー!!」

「何ですか？人が寝ているのに……」

「泣いていたからな……」

私が？

「泣いていた？」

そうして鏡を見てみると涙の後が確かにあった。

「それとアルト」

「……何ですかエヴァ？」

「そんなネックレスしていたか？多少の魔力を感じるんだが……」

そう言われ首もとを見ると獅子を模したネックレスがかかっていた。

“ グリーヴァ ”

ふとその名前が頭をよぎった。

「…… “ 獅子の心 ” 」

「……どうしたんだ？」

「いえ、きっとこれは神様からの贈り物でしょう。」

「神様ねえ……」

むっ

「疑ってますね？」

「当たり前だ！！サアはけ。吐くまでここから出さんぞ！」

エヴァがドアの前に立つ

なら、

「窓から出ればいいんですよ。」

「なっ！？」

……獅子の心

……気高い誇り

……仲間を護る強さ

「手に入れて見せますよ……仲間のために……」

とりあえず

「今日1日をどうやって過ごしましょうかね？」

刹那の所にお邪魔しましょう。

そうして1日がまた過ぎていく

EX: story 夢? (後書き)

ネックレスは魔力を帯びている……

ハイ、多分武器になると思います。

仮契約とは別に武器が欲しかったんですよ

麻帆良祭の時にヒーローユニットとしてエクスカリバーはちょっと注目浴びすぎるかなあ? って思いました……

ちなみに仮契約時にでるアーティファクトは武器では無いですよ
楽しみに待っててください。

新しい武器はまあこの話に出てきた人物の昨年が分かる人には分かりやすいかもしれません。

設定

銃と剣の複合武器ガンブレード

名前 ライオンハート

ネックレスにアルトの魔力を流すと現れる。

切る瞬間にトリガーを引くと衝撃で威力がます。

刀身の色は青

魔力の流す量により切れ味が変わる。

扱いは難しい……

宝具としてのランクはBランク辺り

また、設定の部分に詳しくのせておきます。

次回からは本編を進めますね

別荘？（前書き）

今回からここはこの作品に出てくるキャラがいろんな名セリフを大分変換して言っていく場所にします。

僕は……殺したくなてないのに

《ガン ムSEED キラ・ヤマト》

私は……ピーマン嫌いです

《駄々っ子アルト》

我が儘言わずに食べんか!!

《皆の保護者？エヴァ》

せつちゃん？なにどさくさに紛れてのこしとるん？

《怒ると怖いお嬢様このか》

エッ!!いやこれは……

《嫌いなものを残した所を見られた神鳴流剣士 刹那》

別荘？

平日 学校の授業

ネギがやつれながら授業をしている。

「で、では 次の所を……四葉さん」

「ねえ、ネギ君疲れてるってゆかヤツれてない？」

「五月病か？」

「気の早い夏バテとか」

クラスメートたちもネギの様子に気づいている

キンコンカン…

授業終了のチャイムになる

「じゃ、じゃあ今日はここまでに…では」

そう言って教室のドアに向かって歩き始めるネギ

すると

ゴンッ

「アウト」

ガンッ

「へぶっ」

黒板とドアにぶつかっていく。

するとアスナが

「たった二三時間の練習であんなになっちゃうなんて絶対おかしいわよ。何やってるかつきとめてやる」

そんなアスナに賛同するののかのどかたちも

尾行するようだ。

付き合いきれませんね。

まあやっているのは普通の修業ですし……ほっといてもなにも無いでしょう。

さて、今晚の料理は何にしましょうかね？

そう考え私はスーパーに食材を買いに行った。

スーパーに着いて食材を吟味する

このスーパーは交渉しだいで値段が安くなるので良く利用するんです。

「おや、アルト嬢ちゃん久しぶりだな。」

「嬢ちゃんは止めてくださいって何時も言いますよね親父さん？」

「まあ良いじゃないか……若い娘と話せるとおじさんのテンションは上がるんだよ。」

「まあ良いですけど……このキャベツ。虫に食われた後がありますね……二百円にまけてくれませんか？」

「おいおい、無農薬の証拠だぜそれは……だが良いだろう代わりに他の物も買ってけばな。」

「……商売上手いですね、良いでしょうあそこの段ボールの中にあるトマト全部買いましょう。」

「まいどあり!!」

そうして買い物を済ませエヴァ邸に帰る途中

結界に侵入者の気配がした

「取り敢えず荷物を置いてからですね」

雨の中走って帰る

家に帰るとエヴァが居なかった

もう行ったんでしょっか？

ネギの魔力も移動していますし……取り敢えずネギと合流しますかね。

もしかしたら新しい武器も試せるかも知れませんし……

力を貸して下さいね

“ グリーヴァ ”

世界樹広場に着くとネギがちょっと年齢のいった老人と戦っていた。

「僕が……僕が戦うのは」

「一般人の彼女達を巻き込んでしまったという責任感かね？助けなければという義務感？」

そこで老人は一旦言葉をきる

「義務感を糧にしても決して本気になどなれないぞネギ君……実際につまらない。いや……それとも君が戦うのは……あの……雪の夜の記憶……から逃げるためかね？」

「え……」

記憶？

ネギの過去でしょうか……

「な……なんでそれを……ち、違います僕は……」

「そうかね？では……」

そう言つて老人は帽子を脱ぐ

するとその下から悪魔が現れた

「コレなどはいかがかね？」

あの悪魔……ネギに関係あるんですかね？

気付かないうちに手に入っていた。

「はっはっは……喜んでもらえたかな、いい顔だよネギ君……その表情だ。いやあ今時……ワシが悪魔じゃー……と出ていつでも若い者には笑われたりしてしまうからねえ」

「あ……あなたは……」

「そうだ君の仇だネギ君。あの日召喚された者達の中でもごくわずかに召喚されは爵位級の上位悪魔の一人だよ。」

するとまた帽子をかぶり直し

「君のおじさんやその仲間を石にして村を壊滅させたのもこの私だ。あの老魔法使いには全くしてやられたがね。」

見てわかるほどネギに動揺が走る

「どうかね？自分のために戦いたくなつたのではないかね？」

すると一人の少年がネギに近づき

「ネギ！大丈夫か？オイネギ！しっかりせえ！！ネ……！！？」

その瞬間ネギの姿が消えた。

ネギはあの老人のすぐ目の前にいて空中に打ち上げ追撃する

「な……何やあの動きは!?!」

……魔力の暴走

ここまで出来るとは……だけどネギ……その戦い方はダメです!!

気づいたら体が動いていた。

ネギが追撃をしていると一瞬の隙をついて悪魔の姿に戻り何かをしようとする

あれは……石化!?

間に合え!!

ネギの元に走り突き飛ばす

ドシャツ

なんとか避けれましたか

「ネ……」

「兄貴!？」

すると暴走が落ちついたのかネギが自分の手を見ながら

「あ……う……ぼ……僕……今……?」

「　　ッ……まったく……」

「オイ大丈夫か?」

少年が近づいてきてネギを心配する

私は頭から少し血が流れてますが許容範囲でしょう

するとようやくこっちに気づいたのか

「あ、アルトに小太郎く……」

「この……アホかーっ!!」

少年がネギの頭を殴る

「へぷ」

ネギが殴られた頭を押さえながら

「こっこここ小太郎君!？」

「アホ!!いくら力があつてもあんな闇雲に突っ込んでったら返り討ち喰らうんは当たり前や!!」

「そこの少年の言う通りですよネギ」

「確かにお前の魔力の底力がスゴイのはわかったわ!わかったけど
な今の戦いは最低や!!周り見えてへんし結局決め手も入れてへん
!!あんな力押し俺でも勝てるわ!!」
「たく頭良さそな顔しとるく
せに!仇か知らんけどおっさんの挑発に簡単にキレよってからに!
!」

そして少年がネギの頬をつねる

「アホ」

「むぐぐーっ!!」

「共同戦線ゆーたやろ二人であのおっさんブッ倒すで」

「……二人って私は？」

「あんた女やろ？女は下がって見とき。」

「こ、小太郎君……アルトは男だよ」

「……………え？」

あ、その顔面白い

「な、なら三人で、や。これならいいやろ。」

「……そうだね小太郎君」

「分かりました。」

「ふん……もう終わりがねネギ君」

今まで黙っていた悪魔が話した

「今のは大変良かったのだがねえ……はははい仲間が出来たようだ。だがどうするかね？君達三人で私に勝てるのかな？」

ザッ

構えを取る

「ネギ今の最強モードみたいのまたいけるか？」

「い、今の自分でもどうなったのか……アスナさんが捕まっている限り魔法が効かないっていうのも厄介だし……」

「まあそうでしょうね。正直私も新しい武器でして……使い慣れて無いから足を引っ張るかも知れませんか。」

すると今まで捕まっていたこのか達の方から魔力反応がおきる。

水の檻から脱出した朝倉がアスナのネックレスを引きちぎる。

「今だネギ君!!」

「みんな!!」

「やるやないかねーちゃん達!!」

「流石ですね。」

もう一度構え直し

「へへへっ……もういくしかないね!!とっておきのやつがある！
小太郎君、アルト前衛頼める!？」

「当たり前です!!」

「ナメンなや!お前こそ大丈夫かいな!」

「ふふふ…やるじゃないか」

相手も構えを取り

「いいぞ！来たまえ！！」

「おっちゃん何笑つとんや！！もう魔法は……防げんのやで！！」

「行きます！！」

小太郎が分身し突っ込んで行く

しかしその分身もすべて吹っ飛ばされる

「どきたまえ小太郎君。私の狙いは……」

「がっ……」

最後の小太郎が吹き飛ばされ

「ネギ君唯一人だよ！！」

そしてまた石化の技をしようと構えるが

「甘いです!!」

そこに青い刀身を持つ剣を持ったアルトが斬りかかる。

「グッ……だが」

それすらも避けネギに技を放とうとするが

「こつちが本体やおっちゃん」

足下に小太郎が構えており
掌底を放ち

「アルト!!」

敵に隙を作り

「ハアッ!!」

その隙を狙いアルトが剣で片腕を切り落とす。

「ネギ今です！」

さらに続けてネギが

「魔法の射手雷の一矢！！攫打頂肘！！」

吹き飛ばし

「ラス・テルマ・スキルマギステル来たれ虚空の雷薙ぎ払え」

呪文を詠唱する

「ぬうつっ」

「決めるネギ！！」

「やりなさいネギ！！」

「うわあああ！！」雷の斧！！」

辺り一帯に雷が落ちたような衝撃が走る。

煙が晴れ

横たわっている悪魔が

「……君達の勝ちだ……トドメを刺さなくていいのかね？このままにすれば私は唯、召喚を解かれ自分の国へ帰るだけだ……しばしの休眠を経て復活してしまうかも知れんぞ？」

「……僕は……」

「君のことは少し調べさせてもらった。君が日本に来るまえに覚えた9つの戦闘用呪文のうち最後に覚えた上位古代語魔法……そのための呪文のハズだぞ？本来封印することではしか対処できない我々のような高位の魔物を完全に討ち滅ぼし消滅させる超高等呪文。君が復讐のために血のにじむ思いで覚えた呪文だよ。」

「……ネギ……トドメさすんですか？」

ネギは首をふり

「……僕トドメは……刺しません。」

「……ほう」

「六年前……あなたは召喚されただけだし……今日だって人質にそんなひどいことはしなかった。それにあなたの方こそ本当の本気で戦っているように見えませんでした。僕には……あなたがそれ程ひどい人には……」

すると老人が笑い

「どうかな？やはり私は全くの悪人かも知れぬぞ。何せ悪魔だからねえ。」

「悪人がそんない顔しますかね？」

「お嬢さん……いるかもしれないだろう？」

「まあね。それと私は男ですよ。」

「本当に良いのかね？」

最後の確認のようにネギに再度問う

「トドメは刺しません。」

「……ふ…ふふはははネギ君。君はとんだお人好しだなあやはり戦いには向かんよ。」

笑いながらそう言いこのかを指差す

「コノエコノ力嬢……おそらく極東最強の魔力を持ち……修練次第では世界屈指の治療術師ともなれるだろう。成長した彼女の力をもつてすればあるいは…今も治療のあてのないまま静かに眠っている村人達を治すことも可能かもしれぬな」

「……………」

「まあ何年先になるかはわからんがね。」

「……………！」

老人の体の大半が消えていく。

「ふふ……礼を言っておこうネギ君。いずれまた成長した君を見る日を楽しみとするよ。私を失望させてくれるなよ少年」

そう言っで完全に姿を消した。

次の日

世界樹広場

ネギが手すりに座って落ち込んでいる。

「ネギ君昨日からずっとあんな感じなんや。声かけづらいし心配やわぁ……」

このかが心配をしている。

「まあ昨日の今日ですから……そっとしておくのが…」

「……ネギ」

すると

「オーイネギーツ…！」

「ネギーツおはようございます…！」

「「「ん？」「」「」

「何朝からボーツと阿呆ヅラしてんやシャキッとせえ…！」

「こつ小太郎く…プルアッ!？」

いきなり小太郎の右ストレートがネギを襲う

「オッス」

「小太郎…… 出会い頭に右ストレートはどうでしょうか……」

「えーやんか男同士だし… それより聞いてやネギ、本山の反省室から脱走したの今回の件でチャラになったわ!!」

「ええっ ホントに？良かったね。」

「学園長が西の長に掛け合いましたからね…… それよりネギ…… 元気がないですが…… 大丈夫ですか？」

「えっ？ っつんそんなことないよ」

すると決心を固めたように

「…へへ…… アルト、小太郎君…… 僕…… 魔法剣士…… にすることに
したよ……」

「何っ！？ マジか！？ 何でやイキナリ！？」

「本当ですかネギ！？」

「あれ”魔法拳士”かな？いや何でってその……昨日小太郎君とタッグ組んでちょっと楽しかったしアルトに憧れて……」

「せやろせやろなあー！！男はやっぱ接近戦やでー！」

「……憧れ……ですか　　なら早速模擬戦ですね」

「おう！！勝負やネギー！！」

「ええーっ！？今から！？ちよっ…実は今昨日無理したせいか身体中痛くて……」

「何イ！？ケガなら昨日このか姉ちゃんのアーティファクトで治してもろたやろー！！」

「そうですよネギー！！仮病は許しません。」

「あははは まあ新しい友達もできたみたいやし、心配ないかなあ」

「そうですね元気は出たようです……悪友といったカンジですが……
アルトとも近づけたようですし」

スキット集 弟子入り後、麻帆良祭準備前（前書き）

え、

言い訳はありません。全て作者の私が悪いだけです。

更新を待っていてくれた人

ホントにすみません？

これから前回のように毎日更新……とまではいかないと思います
が出来る限り早く更新していきたいと思っています……

イヤ、早くに更新します

次の更新は明後日までには……

今日の所はスキット集で、

では

スキット集 弟子入り後、麻帆良祭準備前

英語の授業中

ネギ「えっと……アルトもこれぐらいのなら読めるよね？」

アルト「もちろん。舐めないでください」

刹那（本当に大丈夫だろうか？）

アスナ（流石にコレは……私でも読めるよ）

このか（でもアルト君やし……）

クラス全員（（（いくらなんでもappeぐらい……）（（（

アルト「エー・ピー・ピー・エル・イーです！」

ネギ「アルファベットを読むんじゃなくて、単語で読んでください
！！」

クラス全員（（（その読み方を自信満々でいったあー！！）（（（

英語だけは壊滅的にダメなアルト君

放課後の廊下

このか「なあなあアスナ、なんかウチらの教室から声が聞こえるんやけど……」

アスナ「え？……ホントだ。でも……こんな時間まで残ってるなんて誰かしら？」

このか「確認しいへん？ウチちょっと気になるわ。どっかで聞いたことある声やし……」

アスナ「そ、そうね。（何か面白いことだと思っし……）」

アルト「刹那、ほ、ホントに……良いんですか？／＼／＼」

刹那「ええ。こんなこと頼めるの……あなたしか居ない／＼／＼」

アルト「でも！！刹那にはこのかが！！／＼／＼」

刹那「このかお嬢様に……こんなことは頼まないから。」

刹那「私は、あなただから……アルトだからこんなことを頼むんです。」

アスナ（え？なに？この光景？）

このか（せっちゃんがウチに頼めない事ってなんやる？）

アルト「……………」

刹那「お願いだから……私の宿題手伝ってください！！」

アスナ・このか（そんなことなの／かい！？）

アルト「だから宿題の手伝いを私に頼んでも意味無いでしょう同じ学力程度なんですから……………」

刹那「いえ、アルトは英語だけで点数を落としているだけで後は平均以上じゃ無いですか！」

このか「（宿題ぐらいなら手伝うのに……）なあアスナ」

アスナ「なに。」

このか「帰ろ」

アスナ「……そうね」

宿題を手伝って貰おうとアルトに頼みこんでいる刹那

エヴァの別荘で……

アルト「　　　」

エヴァ「どうしたアルト？鼻歌なんか歌って？」

刹那「確かに珍しいですね。何か良いことでも有ったんですか？」

アルト「ん？実は今日八百屋さんでオレンジが安く売ってたんです！」

エヴァ「オレンジねえ」

刹那「それがどうかしたんですか？」

アルト「どうかって……オレンジですよ刹那！！甘い！！美味しい！！体に良い！！の三拍子揃った究極のフルーツじゃないですか！！」

刹那「究極って……？（ビタミンCが豊富ぐらいじゃないんですか？）」

エヴァ「刹那、コイツはオレンジが大好きなんだ。だからなにを言っても無駄だ。」

アルト「~~~~~
~~~~~  
~~~~~今日の夕御飯はオレンジパスタ」

刹那（お、オレンジパスタ！？）

エヴァ（またあの甘いパスタの日々が続くのか？）

修業の間の休憩中の会話

学園祭準備 その1

朝8時

31A教室内

ふわあああ

最近夜遅くまで起きていることが多いせいか寝不足ですね……

「アルト、眠そうだが大丈夫か？」

エヴァですか……

「正直……眠いです。」

「フン、夜遅くまでゲームをしてるからそうなるんだ。」

そう言いながら何かを手渡してくるエヴァ

なんですかコレ？

「メイド服？……ですよね」

「あぁなんかコレに着替えて教室に入ってくるボーヤを脅かすらしいぞ。」

なるほど

「コレを着れば良いんですね。分かりました。」

着替えてから少し時間がたち

「もうそろそろネギ先生がいらっしゃいますわね。皆さん、準備は良いですか？」

いいんちよがメイド姿で確認する

「「「「おー！」「」「」

「……おー」

すると

ガラッ

「おはようございまーす」

教室のドアを開けてネギ先生が入ってきた

「……いらっしやいませ　　ようこそ3ーAメイドカフェ”アル
ビオーニス”へー！」「……」

満面の笑みを浮かべながら迎える

「わああっ！？　なな何ですかこれは！？／／／／」

慌てるネギに対していいんちょとゆーなが理由を述べる

「3ーAの出し物が”メイドカフェ”に決まりましたの」

「ウチの学校お金儲けしていいからね！お小遣い稼ぐならコレだよ
！」

拳をあげながらゆーなが熱く語ったあと

「私、メイドカフェがこういうものかよくわかりませんが皆さんた
つての願いで衣装を御用意させていただきましたわ」

（（ふっふっふバカと金持ちは使いよう……））

悪どい顔をしているゆーなとパル

まあ良いでしょう

そして流れからかみんなネギを相手に接客練習を始める

私は刹那にこの格好を見せてきましようかね

「刹那」

「あアルト、おはようございまって！？なんて格好してるんですか
！！！！！！」

「え？どこかおかしい所ありますか？一応着方に間違いは無いと思うんですが……」

その場でクルッと一回転してみる

「アルト君かわええなあ」

「ありがとうございますこのか」

そんな他愛もない会話をしていると刹那に

「猫耳スクール水着！！！」

「えっ？意味がよく……」

理解できませんと繋がったのでしょうか

そのままカーテンの向こうに連れていかれた

そしてすぐ

「……／／／／」

顔を真っ赤に染めて猫耳スクール水着で出てくる

なるほど名札の部分をひらがなで書くところがポイントが高いんですね

「やりすぎたか……」

「うん……」

朝倉とゆーなからそんな声が聞こえてくる

さらにネギがいた方からは

「二万円」

「は…はい」

クーがネギにどう考えても暴利な値段をふっかけいた

「可愛いですよ刹那」

「そ、そうですか……／＼／＼」

バンッ

いきなり教室のドアが開きその先には新田先生が……

「お前ら朝っぱらから何をやってるかーッ!!」

「ひいひい!?!」

「新田先生私達はマジメに学園祭の出し物の討議を……」

「もうHRは終わつとる！！ネギ先生もネギ先生です。」

「はっはっは」

「全員正座ー！！」

わ、私もですか？

その日は結局それ以上のことは進まなかった

次の日

寮にある刹那の部屋を朝っぱらから訪ねる

「刹那、朝ですよ」

ドタドタドタ

ガチャ

「お、おはようございますアルト。お待たせしました。」

今日は朝から屋台に食べに行く予定なんです。

「さ、このかお嬢様の部屋に行きましょっか」

「ハイ」

ネギたちも早く起こして行かないと……

「よし！今日は遅刻しないで済みそうね」

「毎日こつやとえーのになあ」

走りながらアスナとこのかが会話をしている

よく舌を噛みませんね

「遅刻じゃなくても走るんですね」

刹那……今さらですか

「でもこんな早くに朝ごはんも食べずに出てきてどうしたんですか？」

あれ？

「ネギは聞いてないんですか？」

「昨日言つの忘れてたのよ。実はね学園祭準備期間中の名物があるのよ」

アスナが謝りつつネギに説明をする

「ネギ君ここやここ」

このかが指さす先に超包子と看板が出た屋台電車が止まっていた

口を開けたままネギがみている

なかなか繁盛していますもんね。

「あ……ネギ先生」

するとウェイトレスをやっていた茶々丸が此方を見つけ、両手に点心の器を持ちながらこちらに一礼してきた

そして空いている席に案内をしてもらいそこに座る

「ヘーチャオさん達の屋台ですかー」

「ネギもチャオ一味の点心が美味しいの知ってるでしょ。毎年大人気なのよ」

「うちらもファンやから学園祭の時は早起きして食べに来るんよ。」

「私も学園祭の時は利用しますね。」

「あれ？アルトは？」

「去年は店側でウェイターをしました。」

そうやって会話を楽しんでいるとネギの目の前にスープが置かれる

「どうぞ」

ニコッ

そんな音が聞こえるような笑顔で四葉さんが持ってきていた

「あ、どうも四葉さん」

「えーなーネギ君だけ」

このかが羨むように言う

「まあまあこのか。なんなら私が奢りますから」

「ホンマに!？」

「サービスの特製スタミナスープ……元氣出ます」

四葉さんはネギにスープの説明をしている

「あ、はい」

「あの…修行頑張ってるって聞きました……くーさんから。でも…無理はダメです…体壊すし…」

「体が資本!健康第一です!!」

手をぐつとしながらネギに語る四葉さん

「ハイ!!あの……どうして僕だけサービスを……」

疑問に思ったのかネギはそう聞いた

「最近元気がないよいにみえたので……修行大変そうですが……お仕事も頑張ってください……」

そう言って去っていった

会話の間に注文していた点心がテーブルにとどいていたため私たちも食べ始める

「いい人ですねー四葉さん」

「あん、ネギ君今さら何言っとるんー」

「四葉さんはスゴイ人ですよ。料理は達人だし」

「人を気遣う心も持ってますから」

「あんた先生なんだしちゃんと生徒のこと把握しときなさいよ」

そしてスープを一口のんで何かあったのか

「よし！！ウチのクラス結局出し物決まってるじゃないし！朝のHRから先生の仕事がんばるぞーッ！！！」

「わ、何よ突然？」

「おおネギ君が燃えとる！？」

「まさかスーパパワー？」

「何ですか刹那。スーパパワーって？」

そんな風に朝の時間は過ぎていった

学園祭準備 その1（後書き）

なんとか予告通りに更新できました。

次回は…… 17日までには？

アルト「誤字、脱字、が合ったら教えてください」

学園祭準備 その2（前書き）

予告した日より遅れてしまいました…

すいません

次回は23日までにはなんとか……

学園祭準備 その2

3ーA教室

「えー、それでは皆さん。学園祭の出し物を何にするかですが…」
教卓でネギが出し物について意見を聞いていく

「いや、しかしそいつは難しい問題ですぜネギの親分」

「ああメイドカフェを越える集客力となるとねえ……なかなか」

ゆーなと朝倉がため息をつく

いや、別にメイドカフェじゃなくとも……

「ハイハイー!!」

「さ、桜子さん」

桜子ですか……いい案を出してくれると良いのですが

「ドキッ 女だらけの水着大会・カフェ ……がいいと思いまーす」

クラスの大半が転けた

「何なのよソレ！意味わかんないわよー!!」「えーフツーに楽しそくない？ポロリもあるよ」くないわよっ!!」

アスナが突っ込むが

「「…それだ」」

ゆーなとパルが賛成するが

「「うそつけー！！」」

反対する人もいる

「じゃあじゃあ」女だらけの泥んこレスリング大会喫茶”！！」

まき絵がまたバカの意見を…

「「ネコミミラゾクバーツ」」

双子の片割れの風香が外見に合わない意見を……
意味わかってるんですかね？

「もう素直に」ノーパン喫茶”でいいんじゃないかしら？」

千鶴……その意見はため息をつきながらいうものではないでしょう

……

「「「それだあああ！！！！」」」

「それだあじゃないわよ！！！！どんな喫茶なのよ！訳わかないわよ！！」

「80年代に実在したと記録にありますが」

「あつたんですか茶々丸？」

「しかし今は違法のようです」

「何歳なんだあのおばはん」

「ダメッ千雨それ以上は」

「おば……？」

「「ひっ」」

いつの間に私と千雨の後ろに？

アッ

それからいろいろあつたのか

私が千鶴の制裁からようやく解放されるとパルが

「確かに……カワイイ女の子を見せ物にするというのはいささか単純かも知れないわね……だけど逆ならいいんじゃない？」

「「「おおっ」」」

「じゃアルト君をノーパンに……！」

その声をきっかけにみんなが私の周りに集まる

「ハ？ちよつと待ってください……上着のボタンをはずさないで！！パンツは、パンツはダメです！！さすがにそれは」

「コラーお前ら朝っぱらから何を……」

新田が現れた

終わった……

もちろんそのあと皆で説教をくらいました

「うう……ひどい目にありました」

説教が終わったあとアスナたちの所に行くと

「あードンマイ」

「ゴメンなあ皆止められなくて」

「肌白かったですね。」

「アスナとこのかは慰めてくれてるのに刹那だけは着眼点が違いますね。」

「い、いやでも思ったことを言っているのであって……」

「……刹那のえっち」

「なっ！！！！／／／／」

「いやでも」

「ネギも大変でしょうね。このクラスを纏めるのは難しいでしょうし……」

「出来る限り手伝ってあげたいんだけどね」

アスナが頬をかきながら呟く

「ウチらだけじゃなあ」

「ネギ先生になにかきっかけがあると良いんですがね」

今日はそこでお開きになった

次の日

「えーそんな訳で……」

昨日とはうって変わって次々と物事を決めていくネギ

何があつたのでしょうか？

「なかなか決まらないのでみんなのアイディアから僕が厳正に選考と抽選した結果、31Aの出し物を“お化け屋敷”に決めたいと思うのですが、ど……どうでしょうか？」

「「「……………」」」

クラス中が静かになり

「あ……う」

ネギがうるたえる

すると何人が立ち上がり

「「「いいんじゃない？」」」

「よおーっし！！そうと決まれば思いつきり怖い奴を！！」

「お化け屋敷ならお化け屋敷で色々やりようはあるってもんよ！」

「いやそれだけだとつまらんからやっぱ」ヌーディストお化け屋敷
「！！」

「それだ！アルトを脱がせーっ！」

「嫌ですよ」

「お化け屋敷か……アルトの衣装は黒のゴスロリだな」

「了解ですマスター準備しときます」

お知らせ

再開したばかりのこの小説ですが少し作者の都合で次回の更新を9月1日にさせてもらいます。

理由は……作者が夏休みの課題をほとんどやっていないのと少しの間家にいなくなり落ち着いて書けないからです。

作者の他の小説はストック分があるヤツは更新するかも知れませんが

9月1日には本編を更新したいと思います

9月にある作者の就職試験が合格だった場合10月からの更新は多少早くなると思います

誠に自分かってな言い分とは思っていますが

どうかご容赦を……

では9月1日までお待ちください

ホントにすいませんなお、このお知らせは9月1日になったら削除

させていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5771n/>

転生しました.....原因は分かりません

2011年8月24日21時10分発行